哲學研究　第百廿三號　第十一卷　第六冊

場所

西田幾多郎

一

現今の認識論に於て、對象、內容、作用の三つのものが區別せられ、その關係が論ぜられる、がかゝる區別の根柢には、唯、時間的に移り行く認識作用と之を超越する對象との對立のみが考へられて居ると思ふ。併し對象と對象とが互に相關係し、一體系を成して、自己自身を維持するには、かゝる體系自身を維持するものが考へられると共に、かゝる體系をその中に成立せしめ、かゝる體系がそれに於てあると云ふべきものが考へられねばならぬ。有るものは何かに於てなければならぬ、然らざれば、有ると

無いとの區別ができないのである。論理的には、關係の項と、關係自身とを區別することができ、關係を統一するものと、關係が於てあるものとを區別することもできる譯である。作用の方について考へて見ても、純なる作用の統一として我といふ如きものが考へられると共に、我は非我に對して考へられる以上、我と非我との對立を內に包み、意識現象を內に成立せしめるものがなければならぬ。此の如きイデヤを受取るものとも云ふべきものを、プラトンのティマイオスの語に倣うて場所と名づけて置く。無論プラトンの空間とか、受取る場所とかいふものと、私の場所と名づけるものとを同一と考へるのではない。

極めて素朴的な考ではあるが、我々は物體が空間に於て存在し、空間に於て相働くと考へる、物理學に於ても斯く考へ來つたのである。或は物なくして空間はない、空間とは物體と物體との關係に過ぎない、更にロッチエの如く空間は物に於てあるとも考へ得るでもあらう。併し斯く考へるならば、關係するものと關係とが一つのものでなければならぬ、例へば、物理的空間の如きものとなるであらう。併し物理的空間と物理的空間とを關係せしめるものは亦物理的空間ではない、更に物理的空間が於てある場所がなければならぬ。或は關係に於て立つものが關係の體系に還元せ

られる時、唯それ自身によつて成立する一つの全きものが考へられ、更にそれの成立する場所といふ如きものを考へる要はないとも云ひ得るであらう。併し嚴密に云へば、如何なる關係も關係として成立するには關係の項として與へられるものがなければならぬ、例へば知識の形式に對しては內容がなければならぬ。縱、兩者合一して一つの全きものが考へられるとしても、此の如きものが映される場所といふもの、がなければならぬ。或はそれは單に主觀的概念に過ぎないと云ふでもあらう。併し對象が主觀的作用を超越して自立すると考へられるならば、客觀的なる對象の成立する場所は、主觀的であつてはならぬ、場所其者が超越的でなければならぬ。我々が作用といふ如きものを對象化して見る時、亦かゝる思惟對象の場所に映して見るのである。意味其者といふものすら客觀的と考へられるならば、かゝるものゝ成立つ場所も客觀的でなければならぬ。或はその樣なものは全き無に過ぎないと云ふでもあらう。併し思惟の世界に於ては無も客觀的意義を有つのである。

我々が物事を考へる時、之を映す場所といふ如きものがなければならぬ。先づ意識の野といふのがそれと云ふことができる。何物かを意識するには、意識の野に映されねばならぬ。而して映された意識現象と映す意識の野とは區別せられなけれ

ばならぬ。意識現象の連續其者の外に、意識の野といふ如きものはないとも云ひ得るであらう。併し時々刻々に移り行く意識現象に對して、移らざる意識の野といふものがなければならぬ。之によつて意識現象が互に相關係し相連結するのである。或はそれは我といふ一つの點の如きものとも考へ得るであらう。併し我々が意識の內外といふものを區別する時、私の意識現象は私の意識の範圍內にあるものでなければならぬ。かゝる意味に於ての私は、私の意識現象を內に包むものでなければならぬ。右の如く意識の立場から出立すれば我々は意識の野といふものを認めることができる。思惟作用も我々の意識作用である。思惟の內容は先づ我々の意識の野に映されたものである。內容によつて對象を指示するのである。今日の認識論者は內容と對象とを區別し、內容は內在的であるが對象は超越的と考へる。對象は全然作用を超越して、それ自身によつて立つものと考へられる。此に於て我々は意識の野の外に出るのである。對象には意識の野といふ如きものはないと考へられる。併し意識と對象と關係するには、兩者を內に包むものがなければならぬ。兩者の關係する場所といふ如きものがなければならぬ、兩者を關係せしめるものは何であらうか。對象は意識作用を超越するといふも、對象が全然意識の外にあるもの

ならば、意識の内にある我々よりして、我々の意識内容が對象を指示するといふこともできない、對象が意識作用を超越するとすら云ふことはできない。カント學派では、認識對象界に對して主觀的に超越的主觀卽ち意識一般といふ如きものが考へられる。併し認識主觀に於て我々は意識を超越して意識の野の外に出ると云ひ得るであらうか。それは意識の野の極限であるかも知れないが、意識の野が消滅するのではない。心理學的に考へられた意識の野といふのは、既に考へられたものである、一種の對象に過ぎない。かゝる意識の野を意識する意識の野はその極限に於ても、之を超越することはできない。又我々が現實的と考へる意識の野といへども、いつでもその背後に現實を超越したものがある。所謂實驗心理學的に限定せられる意識の野といふ如きものは計ることのできる感覺の範圍に過ぎない。併し意識は意味を含んで居なければならぬ、昨日を想起する意識は昨日を包んで居なければならぬ。此故に意識は一般的なるものゝ自己限定とも云ひ得るのである。感覺的意識といへどもそれが反省によつて裏打ちせられる限り意識現象と云ひ得るのである。一般的なるものが極限として達することができないと云ふならば、個物的なるものも達することのできない極限と云はねばならぬ。ブレンターノにそのまゝ同意す

るのではないが、ブレンターノのmodus obliquusといふ如きものが、意識の果まで達すると考へ得るでもあらう。

カント學派に於ては、認識するといふことは形式によつて質料を統一することであると考へるが、かゝる考の背後には、既に主觀の構成作用といふものが假定せられて居なければならぬ、形式は主觀に具せられたものと考へられて居るのである。然らざれば認識の意味を成さない。單に形式によつて構成せられたものといふのは超對立的對象に過ぎない。又客觀的なる形式が客觀的なる質料を構成すると云ふならば、それは客觀的作用であつて認識といふ意味を生ずることはできない。形式と質料との對立と、主觀と客觀との對立とは直に同一視することはできない。判斷作用の對象を成すものは形式と質料の對立に異なつた意味の對立が加はつて來なければならない。判斷の直接の內容を成すものは、眞とか僞とかいふものでなければならぬ。形式と質料の對立を成立せしめる場所と眞僞の對立を成立せしめる場所とは異なつたものでなければならぬ。認識の成立する場所に於ては、形式と質料とが分たれるのみならず、兩者の分離と結合とが自由でなければならぬ。かゝる場合、超對立的對象に對して、主觀性といふものが外から附加せられるものと考へ得る

でもあらう。ラスクの如きも根本的なる理論的形式に對して、全く非論理的なる體驗の對象といふ如きものを根本的質料と考へて居る。併し氏自身も認めて居る如く、知るといふことも體驗の一つでなければならぬ。體驗內容を非論理的質料といふも、所謂感覺的質料と同一ではない。體驗の內容は非論理的と云ふよりも超論理的である、超論理的といふよりも寧ろ包論理的と云はねばならぬ。藝術や道德の體驗についても斯く云ふことができるのである。認識の立場といふのも體驗が自己の中に自己を映す態度の一でなければならぬ。認識するといふのは體驗が自己の中に自己を形成することに外ならない。體驗の場所に於て、形式と質料の對立關係が、成立するのである。斯く自己の中に無限に自己を映し行くもの、自己自身を無にして無限の有を含むものが、眞の我として、之に於て所謂主客の對立が成立するのである。此者は同といふこともできない、異といふこともできない、有とも無とも云へない、所謂論理的形式によつて限定することのできない、却つて論理的形式をも成立せしめる場所である。形式を何處まで押し進めて行つても、所謂形式以上に出ることはできない。眞の形式の形式は形式の場所でなければならぬ。アリストテレスの De Anima の中にも、アカデミケルに倣うて精神を「形相の場所」と考へて居る。此の

如き自己自身を照らす鏡ともいふべきものは、單に知識成立の場所たるのみならず、感情も意志も之に於て成立するのである。我々が體驗の內容といふ時、多くの場合既に之を知識化して居るのである、此故に非論理的な質料とも考へられるのである。眞の體驗は全き無の立場でなければならぬ、知識を離れた自由の立場でなければならぬ、此場所に於ては情意の內容も映されるのである。知情意共に意識現象と考へられるのは之によるのである。

場所といふものを以上述べた如く考へるならば、作用といふのは、映された對象と映す場所との間に於て現れ來る關係と思ふ。單に映されたるもののみが考へられた時、それは何等の働きなき單なる對象に過ぎない。併しかゝる對象の背後にも、之を映す鏡がなければならぬ。對象の存立する場所といふものがなければならぬ。勿論此場所が單に映す鏡であつて、唯對象が之に於てあるといふのみならば、働く對象を見ることはできない。全然己を空うして、すべてのものを映す意識一般の野ともいふべきものに於て、すべてが單なる認識對象として全然作用を超越したものと考へられるのも之によるのである。併し意識と對象とが全然無關係であるならば、之を映すといふことも云はれない、之に於てあるといふことすら不可能である。此

故に此間を繋ぐものとして判斷作用といふものが考へられるのである。一方に對象が作用を超越すると考へられるのみならず、一方に意識の野も作用を超越して之を内に包むものと考へられねばならぬ。而して意識一般の野が對象を容れて無限に廣がると考へられた時、對象は意識一般の野に於て種々なる位置を取ると考へることができる、種々なる形に於て映され得ると考へることができる。是に於て對象が種々に分析せられ、抽象せられ所謂意味の世界が成立すると共に、斯く對象を種々なる位置、種々なる關係に於て映すことが一方に於て判斷作用と考へられるのである。而して超越的對象と意識一般の野と兩極に相離れて、作用がその孰にも屬する能はざる時、作用の統一者として所謂認識主觀といふ如きものが考へられるのである。常識的に物が空間に於てあると考へるならば、物と空間とが異なると考へられる以上、物は空間に於て種々なる關係に於て立つことができる、種々にその形狀位置を變ずると考へることができる。是に於て、我々は物と空間との外に力といふ如きものを考へざるを得ない。而して力の主體として物が力を有つと考へることもできれば、力を空間に屬せしめて物理的空間といふものを考へることもできるのである。私は知るといふことを意識の空間に屬せしめて考へて見たいと思ふ。

從來の認識論が主客の對立の考から出立し、知るとは形式によつて質料を構成することであると考へる代りに、私は自己の中に自己を映すといふ自覺の考から出立して見たいと思ふ。自己の中に自己を映すことが知るといふことの根本的意義であると思ふ。自分の內を知るといふことから、自分の外のものを知るといふことに及ぶのである。自己に對して與へられるといふものは、先づ自己の中に於て與へられねばならぬ。或は自己を統一點の如く考へ、所謂自己の意識內に於て知るものと知られるものと、卽ち主と客と、形式と質料と相對立すると考へるでもあらう。併し此の如き統一點といふのは知るものといふことはできない、既に對象化せられたもの、知られたるものに過ぎない。かゝる統一點を考へる代りに無限なる統一の方向を考へるにしても同じである。知るといふことは先づ內に包むといふことでなければならぬ。併し包まれるものが包むものに對して外的なる時、物體が空間に於てあると考へられる如く、單にあるといふことに外ならない。包むものと包まれるものとが一と考へられる時、無限の系列といふ如きものが成立する。而してその一なるものが無限に自己自身の中に質料を含むと考へられる時、無限に働くもの、純なる作用といふ如きものが考へられる。併しそれは尙知るものといふことはできない。

唯かゝる自己自身に於てあるものと云ふものを更に内に包むと考へらるる時、始めて知るといふことができる。形相と質料との關係について云へば、單に形相的構成といふのが知るといふことではなく、形相と質料との對立を内に包むことが知るといふことでなければならぬ。質料も低次的形相と見るならば、知るものは形相の形相とも云ふことができる、純なる形相、純なる作用をも超越し、此等を内に成立せしめる場所といふ如きものでなければならぬ。ラスクの如く、主觀が客觀的對象の破壞者と考へられるのも之に由るのである。物體が空間に於て可分的と考へられる如く、思惟の對象は思惟の場所に於て可分的と考へ得るのである。物體が空間に於て種々なる意味に於て無限に可分的なる如く、思惟の對象は思惟の場所に於て可分的である。或は知るものを右の如く考へるならば主客對立の意義が失はれ、主觀に統一とか作用とかいふ意味がなくなると考へるでもあらう、主觀といふ意味がなくなると云ひ得るでもあらう。今此問題に深入りすることはできないが、單に物が空間に於てあるといふ如き場合に於ては、空間と物とは互に外的であつて、空間に主觀といふ如き意味はないであらう。併し物の主體性がその於てある場所の關係に移つて行く時、物は力に還元せられる。併し力には力の主體といふのが考へられねばな

らぬ、關係には關係の項といふものがなければならぬ。此の主體といふものを何處に求むべきであるか。之を元の物に求めるならば、何處までも力に還元することのできない物といふものが殘ることゝなる。之を空間其者に歸するならば、空間的關係の項として點といふ如きものを考へる外はない。併し關係の主體となるものが單に點といふ如きものならば、力といふ如きものはなくならねばならぬ。眞に力の關係を內に包むものは力の場といふ如きものでなければならぬ。而して力の場に於ては、すべての線は方向を有つたものでなければならぬ。純なる作用を內に包むと考へられる認識の場所に於ても、すべての現象が方向を有つたものでなければならぬ、規範的でなければならぬ。知るものを包むものと考へることによつて、主客對立の意義を失ふと考へるのは、含まれるものに對して外的なる場所が考へられる故である。單に空虛なる空間といふ如きものは、眞に物理現象を內に包むものではない。眞に種々なる對象を內に包むといふべきものは、空間に於て種々なる形が成立する如き、自己の中に自己の形を映すものでなければならぬ。斯く云へば、於てあると云ふ如き意味が失はれるとも云ひ得るであらう、對象を包んで無限に廣がる場所の意味がなくなると云ふでもあらう。唯、すべての認識對象を內に包み、而も之れを

離れて居る意識の野に於ては、此の二つの意味が結合すると考へることができるのである。

知るといふことが自己の中に自己を映すことであり、作用といふのは、映されるものと映す場所との關係に於て見られ得るとするならば、全然作用を超越したラスクの所謂對立なき對象といふのは如何なるものであるか。かゝる對象も何かに於てあらねばならぬ。我々が有るといふものを認めるには、無いといふものに對して認めるのである。併し有るといふものに對して認められた無いといふものは、尙對立的有である。眞の無はかゝる有と無とを包むものでなければならぬ、かゝる有無の成立する場所でなければならぬ。有を否定し有に對立する無が、眞の無ではなく、眞の無は有の背景を成すものでなければならぬ。例へば、赤色に對して赤色ならざるものも亦色である。色を有つもの、色が於てあるものは、色でないものでなければならぬ、赤も之に於てあり、赤でないものも亦之に於てあるものでなければならぬ。我々が認識對象として限定する以上、有無の關係にまでも同樣の考を推し進めることができると思ふ。此の如き於てある場所といふ如きものは、色の如き場合に於ては、物と考へられる、アリストテレスの如く性質が物に於てあると云ひ得る。併しそれ

では場所の意義は失はれて物が屬性を有つといふことゝなる。之に反し物が何處までも關係に溶かされて行くと考へられる時、有無を含んだものは一つの作用と考へられる。併し作用の背後には尙潛在的有が考へられねばならぬ。本體なき働き、純なる作用といふのは、本體的有に對して云はれ得るのであるが、作用から潛在性を除去するならば、作用ではなくなる。かゝる潛在的有の成立する背後に、尙場所といふ如きものが考へられねばならぬ。物が或性質を有つと考へられる時、之に反する性質はその物に含まれることはできない。然るに、働くものはその中に反對を含むものでなければならぬ、變するものはその反對に變じ行くのである。此故に有無を含む場所其者が直に作用とも考へられるであらう。併し一つの作用といふものが見られるには、その根柢に一つの類概念が限定せられねばならぬ、一つの類概念の中に於てのみ相反するものが見られるのである。作用の背後にある場所は、眞に無なるもの、卽ち單に場所といふ如きものではなく、或內容を有つた場所、或は限定せられた場所とも云ふべきであらう。作用に於ては有と無と結合するが、無が有を包むとは云はれない。眞の場所に於ては或物がその反對に移り行くのみならず、その矛盾に移り行くことが可能でなければならぬ、類概念の外に出ることが可能でなければ

ならぬ。眞の場所は單に變化の場所ではなくして生滅の場所である。類概念をも越えて生滅の場所に入る時、もはや働くといふことの意味もなくなる、唯見るといふの外はない。類概念を場所として見て居る間は、我々は潜在的有を除去することはできない、働くものを見るに過ぎないが、類概念をも映す場所に於ては、働くものを見るのではなく、働きを内に包むものを見るのである。眞に純なる作用といふのは、働くものでなく、働きを内に包むものでなければならぬ。潜在有が先立つのではなく、現實有が先立たねばならぬ。是に於ては形式と質料との融合せる對立なき對象を見ることができるのである。

此の如き對立なき對象といふべきものは、全然意識の野を超越したものと考へられるのであるが、若し全然主觀の外にあるものならば、如何にしてそれが主觀の中に映じ來り、認識作用の目的とならねばならぬのであらうか。私はかゝる對象といへども、場所といふ如き意味に於ける意識の野の外にあるのではない、何處までも場所によつて裏附けられて居ると思ふ。場所が單に有を否定した對立的無と考へられた時、對象は意識の野の外に超越すると考へざるを得ない、對象はそれ自身に存立して居ると考へられるのである。普通に所謂意識の立場といふのは、嚮に云つた如き

有に對する無の立場である。有に對する無が一つの類概念としてすべてを包攝する時、無は一つの潜在的有となる。如何なる有をも否定し果しなき無の立場に立つ時、卽ち有に對して無其者が獨立する時、意識の立場といふ如きものが現れる。而して斯くすべての有を越えた立場に於て、すべての有が映され、分析せられ得ると考へられるのである。併し眞の無はかゝる對立的なる無ではなく、有無を包んだものでなければならぬ。あらゆる有を否定した無といへども、それが對立的無であるかぎり、尙一種の有でなければならぬ。限定せられた類概念の外に出るといへどもそれが尙考へられたものとして、一つの類概念的限定を脫することはできぬ。此故にそこに一種の潜在有の意義すら認められ、唯心論的形而上學も成立するのである。眞の意識といふのは右の如き意識をも映すものでなければならぬ、所謂意識とは尙對象化せられたものに過ぎない。眞の場所といふのは如何なる意味に於ての有無の對立をも超越して之を內に成立せしめるものでなければならぬ。何處までも類概念的なるものを破つた所に、眞の意識を見るのである。對立なき超越的對象といへども、かゝる意味に於ける意識の外に超越するとは云ひ得ない、却つて此場所に映されることによつて、對立なきものと見られるのである。對立なき對象といふのは我

我の當爲的思惟の對象となるものである、所謂判斷內容を一義的に決定する標準となるものである。若し我々が之に反して考へた場合、我々の思惟は矛盾に陷る外はない、思惟は思惟自身を破壞することゝなる。かゝる意義を離れて對立なき對象といふ如きものゝ考へ樣はない。かゝる對象を見る時、我々は對立的內容の成立する主觀的意識の野を超越して外に出ると考へられるでもあらう。併しそれは對立的なる無の立場から眞の無の立場に進むといふことに外ならない、單に物の影を映す場所から、物が於てある場所に進むといふに外ならない。所謂意識の立場を棄てるのではない、却つて此立場に徹底することである。眞の否定は否定の否定でなければならぬ、然らざれば意識一般の如きも、無意識と擇ぶ所はない、意識といふ意味はなくなる。我々が斯く考へざるを得ない、然らざれば矛盾に陷ると云ひ得る時、かゝる意識の野は所謂超越的對象を內に映じてゐるのでなければならぬ。かゝる立場は否定の否定として眞の無なるが故に、すべて對立的無の場所に映されるものをも否定することができるのである。意識の野は眞に自己を空うすることによつて、對象をありのまゝに映すことができるのでゐる。此場合對象が對象自身に於いてあると考へられるが、單に對象がそれ自身に於てあるならば所謂意識內容の標準となる

ことはできない。對象の於てある場所は、所謂意識も亦之に於てある場所でなければならぬ。我々が對象其者を見る時、それを直覺と考へるでもあらう、併し直覺も亦意識でなければならぬ。所謂直覺も矛盾其者を見る意識の野といふものを離れることはできない。普通に直覺と思惟とは全く異なれるものと考へられるが、直覺的なるものがそれ自身を維持するには、やはり於てある場所といふ如きものがなければならぬ。而して此場所は思惟の於てある場所と同じものである。直覺的なるものがその於てある場所に映されたる時思惟內容となるのである。所謂具體的思惟といふ如きものに於ては、直覺的なるものも含まれて居なければならぬ。意識は何處までも一般概念的背景を離れることはないと思ふ。一般概念的なるものが何時でも映す鏡の役目を演じて居るのである。我々が主客合一と考へられる直覺的立場に入る時でも、意識は一般概念的なるものを離れるのではない、却つて一般概念的なるものゝ極致に達するのである。矛盾を意識する立場に於いて一般概念的なるものを破つて外に出ると云ふのは、對象化せられた一般概念的なるものを意味するのである。此の如きは既に限定せられたもの、特殊なるものに過ぎない、知るといふ意味も有たない。直覺的なるものを映す場所は、直にまた概念の矛盾を映す場所で

なければならない。

直覺の背後に、意識の野とか、場所とかいふものを認めると云ふには、多くの異論があるかも知れぬが、直覺といふのが單に主もなく客もないといふことを意味するならば、それは單なる對象に過ぎない。既に直覺といへば、知るものと知られるものとが區別せられ、兩者の合一を意味せねばならぬ。而して知るものは單に構成するとか、働くとかいふことを意味するのではなく、知るものは知られるものを包むものでなければならぬ、否之を內に映すものでなければならぬ。主客合一とか主もなく客もないと云ふことは、唯、場所が眞の無となると云ふことでなければならぬ、單に映す鏡となるといふことでなければならぬ。特殊なるものが客觀的と考へられ、一般なるものは單に主觀的と考へられて居るが、特殊なるものも知識內容としては主觀的であると云ふことができ、若し特殊に對して客觀的所與を認めるならば、一般的なるものに對しても客觀的所與といふ如きものを認め得るであらう。カント哲學に於てはこれが單に先驗的形式と考へられるのであるが、かゝる考の根柢には、主觀の構成作用によつて客觀的所與を構成するといふ考が前提となつて居るのである。併し構成するといふことは、直に知るといふことではない。知るといふことは、自己の

中に自己を映すといふことでなければならぬ。眞のアプリオリは自己の中に自己の內容を構成するものでなければならぬ。此故に構成的形式の外に、ラスクの如く領域の範疇 Gebietskategorie といふものをも考へ得るであらう。我々の認識對象界に於て限定せられた一般概念を見るのは、かゝる場所が自己を限定するによるのである。場所が場所自身を限定したもの或は對象化したものが所謂一般概念となるのである。プラトンの哲學に於ては、一般的なるものが客觀的實在と考へられたが、眞にすべてのものを包む一般的なるものは、すべてのものを成立せしめる場所でなければならぬといふ考には到らなかつた。此故に場所といふ如きものは、却つて非實在的と考へられ、無と考へられたのである。併しイデヤ自身の直覺の底にもかゝる場所がなければならぬ、最高のイデヤといへども尙限定せられたもの特殊なるものに過ぎない、善のイデヤといつても相對的たるを免れない。單に對立的なる無の場所を意識の場所として考へる時、直覺に於てかゝる場所が消失し、更に直覺が於てある場所といふ如きものは認められないかも知らぬが、私はかゝる場所は直覺の內に包み込まれるのではなく、却つて直覺其者をも包むものであると思ふ。直覺が於てあるのみならず、意志や行爲も之に於てあるのである、意志や行爲も意識的と考へら

れるのは之に由るのである。デカートは延長と思惟とを第二次的本體と考へ、一方に運動をも延長の樣態と考へ、一方に意志をも思惟の樣態と考へたが、かゝる意味に於ける眞の延長は物理的空間の如きものでなければならぬと共に、眞の思惟は右の如き場所でなければならぬ。意識するといふことと、知識の對象界に映すといふことゝがすぐ一つに考へられるが、嚴密なる意味に於て知識の對象界に情意の內容を映すことはできない。知識の對象界は何處までも限定せられた場所の意味を脫することはできない。情意の映される場所は、尙一層深く廣い場所でなければならぬ。情意の內容が意識せられるといふことは、知識的に認識せられるといふことではない、知情意に共通なる意識の野はその孰にも屬せないものでなければならぬ、所謂直覺をも包んで無限に廣がるものでなければならぬ。意識の本質的なる意義は唯眞の無なる場所に映されるといふことでなければならぬ。概念的知識を映すものは相對的無の場所たることを免れない。所謂直覺に於て既に眞の無の場所に立つのであるが、情意の成立する場所は更に深く廣い無の場所でなければならぬ。此故に我々の意志の根柢に何等の拘束なき無が考へられるのである。

二

私は今再び始の考に戻つて見よう。有るものは何かに於てあると考へざるを得ない。無論、茲に有るといふのは存在の意味ではない、極めて一般的なる意味に過ぎない。例へば種々なる色は色の一般概念に於てある、色の一般概念は種々なる色の於てある場所と考へるのである。アリストテレスの如く性質は本體に於てあると考へ、而して彼の第二の本體の如きものを考へるならば、種々なる色は一般的なる色自身に於てあると考へることができる。種々なる色の關係は色自身の體系によつて構成せられるのである、色の判斷の眞の主語となる色自體でなければならぬ。一般的なるものは單に主觀的と考へられるが、所謂個物的なるものも考へられたものに過ぎない。此の如き客觀的一般者に於て特殊なるものは如何なる關係に於て立つか。色自體の如きものが種々なる色を有つといふことはできぬ、有つといふに、その背後に隱れた或物が考へられねばならぬ。而してその或物は全く類を異にせる性質を有ち得るものでなければならぬ。然れば特殊なる色は色自體の作用と考へ得るであらうか。色自體といふ如きものは未だ働くものではない、時の關係を含む

ものではない。唯一般的なるものは特殊なるものを含み、後者は前者に於てあるのみである。恰も形あるものは形なきものゝ影であると云ふ如く、形なき空間其者の内に無限の形が成立する如き關係を見るであらう。無論空間に於ては、尙空間に特有なる種々の關係が入つて來るであらうが、空間的關係の基にも一般と特殊との關係があり、之によつて種々の空間的關係が構成せられるのである。赤は色であるといふ判斷に於て、繫辭は客觀的には一般的なるものに於て特殊なるものがあり、一般なるものが特殊なるものゝ場所となると云ふことを意味する。眞に一般的なるものは、自己自身に同一なるものであり、種差を内に包むものでなければならぬ。而して對象が意識を超越すると考へるならば、單に特殊なるものが一般なるものに於てあると云ふの外ないが、更にこの場所の意味を深くして、所謂意識も之に於てある、映すものを映すと考へるならば、眞の場所は自己の中に自己の影を映すもの、自己自身を照らす鏡といふ如きものとなる。有が有に於てある時、後者が前者を有つといふことができ、顯れた有が顯れない有に於てある時、前者は後者の顯現であり後者が働くといふことができるが、有が眞の無に於てある時、後者が前者を映すといふの外はない。所謂意識とは描かれた紙の如きものに過ぎない、映すもの、照らすものではな

い、映すもの照らすものは光であつて、紙ではない。映すといふことは物の形を歪めないで、その儘に成り立たしめる、その儘に受け入れることである。映すものは物を内に成立せしめるが、之に對して働くものではない。我々は鏡が物を映すと考へるのも、斯く考へるのである。無論、鏡は一種の有であるから、眞に物其者を映すことはできぬ、鏡は物を歪めて映すのである、鏡は尙働くものである。他の物を宿すものが、有であればある程、映されたものは、他の肖像ではなくして、單に象徴となり、符號となる。更に或物が他に於てあるといふ意義を失ふに至れば、兩者獨立して、單に相働くとか、相關係するとか云ふの外はない。一般的なるものが單に主觀的ではなく、それ自身に客觀性を有するとするならば、客觀的一般者に於て特殊なるものがあるといふ義は、一般なるものが特殊なるものゝ形を歪めないで、その儘に内に成立せしめると云ふことでなければならない。一般なるものが特殊なるものを有つのではない、特殊なるものゝ結果といふのでもない、又單に空間が物を含む、物が空間に於てあるといふ意味に於て、含むのでもない。一般と特殊とは物と空間といふ樣に相異なるのでもない。特殊なるものは一般なるものゝ部分であり、且つその影像である。併し一般なるものは特殊なるものに對して、何ら有の意義を有するのではない、全然無

である。物が個物的であればある程、一般的でなければならぬと考へられる時、その一般的なるものは個物的なるものを自己の中に映すものでなければならぬ。或は一般と特殊との間には、映す映されるといふ關係はないと云ふであらう。併し何かゞ何かに於てあるといふ時、既にその兩者の間に何等かの關係がなければならぬ、德は三角に於てあるなどと云ふことはできない。於てある物は場所の性質を分有するものでなければならぬ、空間に於てある物は空間的でなければならぬ。而してその性質がその物に本質的なるかぎり、卽ちそれによつてその物の存在が認められるかぎり、一つのものが一つのものに於てあると云ひ得るのである。此故に完全に一つのものが一つのものに於てあるといふには、前者は後者の樣相でなければならぬ。かゝる場合、我々は直に本體と樣相といふ如きものを考へるのであるが、構成的範疇の前に反省的範疇があるとすれば、本體なき樣相とも云ふべき純性質的なるものが互に相區別し、互に相關係すると云ふには互に相映し映されることによつて、客觀的に自己自身の體系を維持すると云ふの外はない。直接なる經驗の背後に考へられた本體といふ如きものを除去する時、本體なき作用、純なる作用の世界を見る。併し尙何等かの意味に於て働くものといふ如きものが考へられて居る。更に働くもの

をも除去する時、純なる狀態の世界を見る、卽ち本體なき樣相の世界を見る。統一を內に見ることによつて純粹作用の世界を見ることができるならば、更に之を推し進めて純粹狀態の世界を見ることができるであらう。構成的範疇の世界以前に考へられる反省的範疇の世界は、此の如きものでなければならぬ。映すと云へば我々は直に一つの働きを考へるのであるが、働くといふことから映すといふことは出て來ない。却つて無限に自己の中に自己を映すといふことから、働くものを導き出すことができるのである。働くといふ考は有限なる一般者、色どられた場所の中に無限の內容を映さうとするより起るのである。すべての有を否定する無の場所に於ては、働くことは單に知ることゝなる、知るといふことは映すことである。更に此立場を越えて眞の無の場所に於ては、我々は意志其者をも見るのである。意志は單なる作用ではなく、その背後に見るものがなければならぬ、然らざれば機械的作用や本能と擇ぶ所はない。意志の背後に於ける暗黑は單なる暗黑ではなくして、ディオニシュースの所謂 dazzling obscurity でなければならぬ。かゝる立場に於ける內容が對立的無の立場に映されたる時、作用としての自由意志を見るのである。意志も意識の樣相と考へられるのは此の如き考によらねばならぬ、作用としての自由の前に狀態と

しての自由があるのである。

繫辭としての「ある」と存在としての「ある」とは、區別すべきことは云ふまでもないが、物があるといふことも一つの判斷である以上、兩者の深き根柢に相通ずるものがなければならぬ。「ある」といふ繫辭は、特殊なるものが一般なるものゝ中に包攝せられることを意味する。一般なるものゝ方から云へば、包攝することは自己自身を分化發展することである。判斷とは一般なるものが自己自身を特殊化する過程と考へることができる。無論、特殊化の過程といふも、直に時間に現れる出來事を意味するのではない、單に一般と特殊との關係を示すのみである。所謂具體的一般者といふものが考へられるならば、判斷的關係はその中に含まれると考へねばならぬ。而して眞に一般なるものは、いつも具體的一般者でなければならぬ。我々が外に物があるといふ時、それは繫辭の「ある」ではなく、存在するといふことでなければならぬ。併し此の如き存在判斷が一般妥當的として成立するには、その根柢にやはり具體的一般者が認められねばならぬ。實在が判斷の主語となると考へられるのは、之に由るのである。非合理的なるものゝ合理化によつて、存在判斷が成立するのである、時間空間といふもかゝる合理化の手段に過ぎない。斯く考へ得るならば、存在するとい

ふことは具體的一般者の立場からの繫辭を意味し、繫辭の「ある」といふのは抽象的一般者からの存在を意味すると考へることもできる。自然界に於て物があるといふことは存在判斷の妥當なるを意味し、赤は色であるといふことは赤は色の概念に於てあるといふことを意味する。所謂存在とは一般的繫辭の特殊なる場合と考へることができる。ブレンターノはアリストテレスが他の關係に於ては項とその基礎とが實在的であるが、對象的關係に於ては後者のみ實在的であるといふ考に本づき、すべての判斷は斯く考へるものがあるといふ存在判斷に直し得ると考へた。(Diepsychische Beziehung im Unterschiede von der Relation im eigentlichen Sinne) かゝる場合、考へるものは所謂心理的實在ではなくして、具體的一般の直覺者でなければならぬ。特殊なるものが一般なるものに於てある時、我々は單に有ると考へる、有が有に於てあるのである。例へば色は自己自身に體系を成して自己自身に於てあると考へられる、所謂對立なき對象となるのである、自然的存在も同樣の意味に於て超越的對象である。之に反し、有が更にその於てある無の場所に映される時、空間に於ける物が種々の象面に於て見られる如く、所謂對立的對象の世界が現れて來る。對立的無の立場に於て、意識作用としての判斷卽ち判斷作用といふものが考へられるのである、判斷作用

とは對立的無の特殊化である。對立的無は尙眞の無の上に映されたる有なるが故に、一種の有として作用の主體となるのである。併し無が主體なるが故に、意識作用は無內容である、ラスクの云ふ如く當たるとか當らぬとかいふに過ぎないのである。併しかゝる作用も眞の無の場所に於ては作用の意味を失うて具體的一般者の繫辭となる。眞の無の場所に於てあるといふことは、それが妥當するといふことである。對立的無の場所に於ては尙作用を見るが、眞の無の場所に於ては單に妥當するものを見るのである。カントの意識一般もすべての認識の構成的主觀としては、眞の無の場所でなければならぬ。此場所に於ては、すべて於てあるものは妥當するものである、妥當的對象である。是に於て、すべて存在的有は變じて繫辭的有とならねばならない。併し意識一般も尙眞の無の立場ではない、對立的無の立場から絕對的無の立場への入口に過ぎない。更に此立場を越えて叡智的實在の世界がある、理想卽實在の世界がある。是故にカントの批評哲學を越えて尙形而上學が成立せなければならぬ。有るものは何かに於てなければならぬ、論理的には一般なるものが、その場所となる。カントが感覺によつて知識の內容を受取ると考へた意識は、對立的無の場所でなければならぬ、單に映す鏡でなければならぬ、かゝる場所に於て感覺の世界

があるのである。意識一般はかゝる意味に於ての意識ではない、所謂意識作用も之に於てある場所でなければならぬ、對立的無を含む無でなければならぬ、外を映す鏡ではなくして內を映す鏡でなければならぬ。之に於てあるものは、すべて單なる妄當となるのであるが、眞の無の場所に於ては、かくの如く妄當するものが存在でなければならぬ。此の如き眞の無の場所に於ける存在の世界は、純粹思惟の對象界にあらずして、純粹意志の對象界と考へることができる。對立なき對象がその於てある場所に映されることによつて、對立的對象を生ずる如く、眞の無の場所に於てある叡智的存在卽ち純粹意志の對象に對して、その對立的對象の世界卽ち反價値の世界が成立するのである。此世界に於ては廣義に於ける善のみ實在であると云ひ得るであらう。醜なるもの、惡なるものは、物なき空間が無と考へられる如く、無と考へられる、アウグスチヌスと共に惡は無であると云ふことができる。而して此世界に於ける意志作用は認識の世界に於ける判斷作用に相當するであらう。唯眞の無の場所に於てのみ自な由るものを見ることができる。限定せられた有の場所に於て單に働くものが見られ、對立的無の場所に於て所謂意識作用が見られ、絕對的無の場所に於て眞の自由意志を見ることができる。對立的無も尙一種の有なるが故に、意識作

用には斷絶がある、昨日の意識と今日の意識とはその間に斷絶があると考へられる。眞の無は對立的無をも越えて之を內に包むが故に、行爲的主觀の立場に於て昨日の我と今日の我とは直に結合するのである。かく考へられる意志は原因なきのみならずそれ自身に於て永遠でなければならぬ。かゝる場合、意志の背後に無意識なるものが考へられるのであるが、意識の背後は絶對の無でなければならぬ、すべての有を否定するのみならず、無をも否定するものがなければならぬ。時間上に生滅する意識作用が意識するのではない。意識は永久の現在でなければならぬ、意識に於ては、過去は現在に於ての過去、現在は現在に於ての現在、未來は現在に於ての未來といふことができる、所謂現在は現在の中に映されたる現在の影である。かゝる意識の本質を明にするものは、知識の體驗にあらずして、寧ろ意志の體驗である。此故に意志の體驗に於て我々の意識は最も明瞭となると考へられるのである。而して知識も意識であるかぎり一種の意志と考へることができるのである。

三

意識の根柢には一般なるものがなければならぬ。一般的なるものが、すべて有る

ものが於てある客觀的場所となる時、意識となるのである。一般的なるものが尙一般的なるものとして限定せられるかぎり、卽ち眞の無なる場所とならざるかぎり、外に本體を見、內に一般槪念を見るのである。すべての實在を包含するスピノーザの本體といへども、尙無に對する有であつて、すべて有るものを含むことができるとするも、否定的意識作用を含むことはできない。眞に主語となつて述語となることなき本體といふべきものは、單に判斷の對象となるのみならず、判斷其者をも內に包むものでなければならぬ。有無對立の立場から眞の無の立場に移る時、その回轉點に於て、カントの所謂意識一般の立場が成立つ。此立場から見れば、すべてが認識對象となる、理論的妥當となる、すべてが認識對象界に映されたる影像に過ぎない。眞實在は認識對象界の後に形を潛めて、不可知的なる物自體となる。意識一般の立場はすべての有を包む無の立場なるが故に、何處までも意識の立場たることを失はない。併しそれは實在としての意識ではない、働く意識ではない、意識作用といふものも意識一般の立場に於て見られたる認識對象に過ぎない。是に於て、問題となるのは判斷作用である。判斷作用は一方に於て時間上に現れる出來事たると共に、一方に於て意味を荷ふものでなければならぬ。全然作用を超越すると考へられる意識一般

が、如何にして意識作用と結合するのであらうか。内面的意味の世界も認識對象界とするならば、かゝる對象界を見る意識一般は、單なる超越的對象を見る意識一般と同一の意義のものであらうか。眞にすべてを對象化する意識一般は作用を超越するものでなく、何處までも自己の内に退いて、すべての對象を内に包むものでなければならぬ。無にして有を包むものを意識とするならば、無限に深き意識の意味がなければならぬ。所謂意識一般とは對立的無より眞の無に轉ずる入口である。對立的有の立場に於て不可知的なる力の作用であつたものは、對立的無の立場に於て意識作用となり、眞の無の入口たる意識一般を越ゆることによつて、廣義に於ける意志作用となる。判斷作用といふのは恰も意識一般の立場に於て見られるのである、判斷と意志とは一つの作用の表裏と考へることができる。意識一般の立場を突き詰めれば、何等の内容ある作用を見ることはできぬ、認識對象界の窮まる所、單に抽象的なるTreffen, Nichttreffenを見るのみである、而して此の如き作用の裏面には意志作用が考へられなければならぬ。圓い四角形といふ如きものを意識するには、背後に於ける意志の立場が加はらねばならぬ。構成的範疇の背後に反省的範疇があると考へ得るならば、反省的範疇の制約をも破ることによつて、我々は隨意の世界に入るので

ある。抽象的思惟と抽象的意志とは一つの門口の兩面である。此門口を過ぐれば、自由なる意志の對象界に入る。此世界に於ては、すべて有るものは妥當的實在であり、叡智的存在である。或は妥當的對象の背後に、存在を考へるの不當なるを云ふでもあらう、存在の前に當爲があると考へられる。併し何故に所謂自然科學的實在のみが存在と考へられねばならぬであらうか。今深く存在の問題に入り込むことはできないが、實在の根柢には非合理的なるものがなければならぬ。感覺的なるものが實在と考へられるのも之に由るのである。併し單に非合理的なるものが實在と考へられるのではない、理性によつて到達することができないと共に、何處までも理性化せらるべきものでなければならぬ。アリストテレスが判斷の主語となつて述語とならないものと云ふのは、最も能くかゝる關係を言ひ表したものであらう。空間、時間、因果の法則によつて統一せられた所謂自然界も、その一例に過ぎない。而して右の如き意味に於て判斷の主語となるものを求めるならば、所謂具體的一般者といふものが最もそれに相當するであらう、具體的一般者が實在といふことができる。その根柢となる一般者が限定せられた有であるかぎり、本體といふ如きものが考へられ、それが對立的無なる時、純なる作用といふ如きものが考へられ、それが眞の無な

る時、卽ち單なる場所ともいふべき場合、所謂叡智的存在といふ如きものが考へられるのである。いづれも同樣の意義に於て、存在といふことができる。私の所謂場所の意義に從つて、種々の異なれる存在の意義を生ずるのである。先づ感覺的性質が於てある場所の意味が一般化せられる時、空しき空間となる。併し空間も一種の有である。更に空間も之に於てある場所といふ如きものは、超越的なる意識の野といふ如きものでなければならぬ。感覺的なるものが直に之に於てあると考へられる時、精神作用となる。所謂意識の野とは否定的無なるが故に、感覺的なるものゝ背後に考へられる主體卽ち所謂物は消滅して、感覺の背後には唯無が見られる、感覺は無の根より生ずると考へられる、卽ち純なる作用となる。併し作用もその於てある場所に於ては一種の存在である。眞の無の門口たる意識一般に於ては、作用も存在の意義を失ひ、一旦すべてが當爲となるであらうが、更に場所が眞の無其者となる時それが又一種の有と考へ得るであらう。之に於てあるものは唯叡智的存在であり、當爲はその影となるのである。

意識一般は眞の無の場所に入る門口なるが故に、物自體といふ如きものは、否定せられて、すべてが認識對象となる。併し眞の無の場所其者に於ては此立場を越えて、

更に主語となつて述語となることなき主體を見ることができる。眞に主語となつて述語となることなき主體といふべきものは、判斷を超越したものではなく、判斷を內を包むものでなければならぬ、單に判斷の主語となるのみならず、判斷の目的となるものでなければならぬ。判斷の根元となり、又その目的となるものが、眞に判斷の主語となり得るのである。所謂自然的存在も此の一例として存在と考へられるのである。唯、意識一般を認識主觀として、その上に出づることのできない頂點と考へた時、我々は更に之を越えて存在を考へることはできない。叡智的存在といふ如きものは形而上學的として排斥するの外はない。併し判斷は一つの意識作用ではあるが、意識の全體ではない、判斷は卽ち意識ではない。我々は判斷の意識の外に意志の意識を有つて居る。意志も意識現象であり、意志の背後にも之を知るものがあると考へられるが故に、意志よりも知識が一層深きものであり、意志も判斷の對象となると考へられるのであるが、意志を意識するものは單に判斷するものではない。意志を意識するものは判斷をも意識するものである。無より有を生ずる、無にして有を含むといふことが、意識の本質である。意識するといふことゝ、意識せないといふことゝが區別せられ、心理學者は意識の範圍といふものを定めるが、かゝる區別を意

識するものは何であるか。意識の範圍として限定せられたものは、意識せられたもので、意識するものではない。眞に意識するものは所謂意識として限定せられないものをも、内に包むものでなければならぬ。意識の背後に潜在的なる何物かゞ考へられた時、もはや意識ではない、力の發展となる。意識の立場は或一つの限定せられた立場に對して、一層高次的な立場とも考へ得るでもあらう。高次的立場は低次的立場に對して、無にして之を包むが故に、意識の意義を有つことができるのである。併し何等かの意義に於てその高次的立場が限定せられた時、更に於てある無の立場が認められ、意識の意義を失はなければならぬ。眞の意識の立場は最後の無の立場でなければならぬ。昨日の意識と今日の意識とが直に結合して一つの意識となるのは此故である。意識の底には、之を繋ぐ他の物があつてはならぬ、かゝるものがあらば意識ではない。意識の流は一方から見れば、時々刻々に移り行き、一瞬の過去にも返ることができないと考へられると共に、その根柢に永遠に移らざるものがなければならぬ。唯この永遠に移らざるものが無なるが故に、意識は繰り返すことができないと考へられるのである。若し意識の根柢に何等かの意味に於て有が認められるならば、それによつて意識は繰り返へすことのできるものとならねばならぬ。

意識の根柢には唯永遠の無あるのみである。我々が內部知覺に於て直接に對象を見ると考へるのも之によるのであらう。對象が意識其者として見られた時、その背後に何物もない、我々は物其者を見ると考へられるのである。而して眞の無の立場といふのは、一つの理想に過ぎないから、內部知覺も單なる極限に過ぎないのである。意識の本質を右の如く考へるならば、判斷といふことよりも、意志といふことが、尙一層深き意味に於て知るといふことでなければならぬ。知識に於ては、無にして有を映すと考へられるが、意志に於ては、無より有を生ずるのである。意志の背後にあるものは、創造的無である。作る無は映す無よりも更に深き無でなければならぬ。此故に我々は意志に於て、最も明に自己を意識し、意識の最高强度に達すると考へるのである。無より有を作るといふことは、潛在的なるものも無に於てあることでなければならぬ、潛在的なるものをも內に映すといふことでなければならぬ。アウグスチヌスは神は時に於て世界を創造したのではない、時も神の創造したものであると云ひ、作るといへば質料がなければならぬが、神は無より質料をも作つたと云ふ如く、無より有を創造するものは、單に時を超越し質料を離れた形相ではなく、時も之に於てあり、質料も之に於てあるものでなければならぬ、卽ち映すことが作ることでなけ

ればならぬ。單に質料を形相化することが知るといふことではなく、自ら空うして自己の中に質料を包み、自己の中に自己を形成し行くことが知るといふことであるとするならば、知るといふこともその背後に既に無より有を生ずる意志の意義がなければならぬ。唯知識に於ては限定せられたアプリオリ、限定せられた形相の上に立つが故に、時を含み質料を包むといふことはできない。知識に於ては對象がそれ自身の體系を有し、それ自身の方向を有つて居る。それ自身の體系を有し、それ自身の方向を有することは、限定せられた一般者の上に立つことを意味する。限定せられたものに對しては、限定せられないものが對立する、潜在的なるものは未だ眞の無ではない、映す鏡の底に尙質料が殘つて居る。無論それは所謂潜在、所謂質料ではないとしても、カントの物自體、現今のカント學派の體驗の如く、除去することのできない質料である。知識の無は極微的無である、眞の無ではない。純知的なる意識一般の立場に於て我々は避けることのできない矛盾に陷るのは、この爲である。意識一般は判斷の主觀でありながら、判斷作用を超越したものでなければならぬ、意識一般は意識の意義を失ふことゝなる。此故に眞の意識一般は却つてその背後に意志の意義を有つて居なければならぬ。カントの意識一般はフィヒテの事行に到らねば

ならぬのである。判斷はその根柢に意志を豫想することによつて、意識一般は意識の意義を有することができるのである。而も判斷の立場は直に意志の立場ではない、判斷は意志の一面に過ぎない。判斷の立場は何處までも限定せられた場所の意味を脱することはできない。フィヒテの事行といへども、尙眞の無の場所に於ける自由意志ではない。自己の中に無限の反省を含み無限の質料を藏するとしても、それは定まれる無限の方向、定まれる意味の潛在たるを免れない。それよりして隨意的意志は出て來ない、自由に方向を定める選擇的意志の意義を明にすることはできない。眞に自由なる意志は無限なる反省の方向、無限なる潛在の意義に對して自由なるものでなければならぬ、卽ち之を內に包むものでなければならぬ、斯くして始めて無から有を作るといふことができる。質料も無から作られたものであり、無より有を作るといふことは、すべての作用の潛在的方向を超越して、而も之を內に包むといふことでなければならぬ、之に於ては質料も映されたる影像であるといふことでなければならぬ。眞に自由なるものは、無限なる純粹作用を自己の屬性となすものでなければならぬ。

包攝判斷に於ては、特殊的なるものが主語として、一般的なる述語の中に含まれる

と考へられるが、主語となつて述語とならない主體に於ては、特殊なるものに於て一般なるものが含まれると考へられる。併し物の判斷に於ても、その主語となるものは單に特殊的なるものではなく、その屬性に對して一般的意義を有つて居なければならぬ。唯、含む一般的なるものと含まれる特殊的なるものとの間に、間隙があるかぎり、物と性質との關係が成立ち、超越的なる物といふ如きものが考へられるのである。併し物が超越的であるといふことは、形相と質料とが相離れ、單に形相化することのできないのみならず、形相化的進行の方向を以てするも限定することのできない質料が殘されると云ふことである、云はゞ質料の方向が無限定であるといふことである。質料が形相に對して外的であり、偶然的であるかぎり、質料の獨立性が認められ、超越的なる物の存在が考へられるのである。而して物の存在を認めるため、於てある場所といふ如きものが考へられねばならぬのである。併し場所其者が內在的有卽ち一種の形相と考へられ、內在的なるものゝ中に超越的なるものが含まれると考へられた時、力の世界が成立する。斯くして又種々なる力の質料性といふものが認められると共に、力の於てある場所といふ如きものが考へられねばならぬ。力の非合理性、力の質料性といふことは、內在的なるものゝ超越性といふことである。

私が茲に力の於てある場所といふのは、物理學者の所謂力の場といふ如きものではない。實在としての力が於てある場所ともいふべきものは、超越的意識の野ともいふ如きものでなければならぬ。此場所に於て力學的力と經驗內容とが合一して物理的力となるのである、物理的力の存在性は此場所に於て立せられるのである。空間も、時間も、力もすべて思惟の手段と考へられた時、與へられた經驗其者が直に於てある客觀的場所は超越的意識の野といふ如きものでなければならぬであらう。物が空間に於てあるといふ如き意味に於て、意識の野に於てあると云ふべきものは、意志の主體卽ち自由なる人格でなければならぬ。所謂認識對象界に於て、感覺が非合理的なる如く、意識の野に於て非合理的なるものは自由意志である。感覺は形式的思惟に對しては、全然外的であり、非合理的であるかも知らぬが、構成的思惟によつては合理化し得ると考へることができる、卽ち右に云つた如く內在的なる場所の內に超越的なるものを盛ることができる。然るに自由意志に至つては、如何なる意味に於ても合理化することができぬ、全然限定せられたる場所を超越したものでなければならぬ。判斷に於て主語となつて述語とならないものが、述語を有するものとなる如く、何處までも場所として限定することのできない、全然非合理的なるものが、意

識の主體となる。而して力の實在性も、要するに意志の非合理性によつて維持せられるのである。主語となつて述語とならないものが本體と考へられるのも、所謂述語的一般としては限定し得ざるものであるが、而も述語を内に包むが故に外ならない、卽ち述語的有が之に於てある場所なるが故でなければならぬ。判斷は主語と述語との間に成立するのである。此場所の中に超越的なるものが見られる時、卽ち潛在的なるものが考へられる時、働くものとなるが、それが單に限定せられた場所と見られる時、兩者を結合するものは判斷となるのである。

有が有に於てある時、場所は物である。有が無に於てあり、而してその無が考へられた無である時、前に場所であつた物は働くものとなる。而して空虛なる場所は力を以て滿たされ、前に物であつて場所は潛在を以て滿たされる。超越的なるものが内在的となるといふのは、場所が無となることである、有が無となることである。併し有の場所となる無に種々の意味がある。單に先づ或有を否定した無卽ち相對的無と、すべての有を否定した無、卽ち絕對的無とを區別することができる。前者は空間の如きものであり、後者は所謂意識の野の如きものである。意識の野に於ては前に物であつたものは、意識現象となり、空虛なる場所は所謂精神作用をもつて滿たされ

る。場所がすべての有を否定した無なるが故に、意識の場所に於ては、すべての現象が直接と考へられ、內在的と考へられるのである。精神作用も無の場所との關係ではあるが、物力の如き有の意味を有することはできぬ、判斷の對象として限定することができぬ、唯所謂反省的判斷の對象となることができるのみである。自然科學的立場からは、精神作用なるものが否定せられるのは此故である。意識の野に於ては、その場所が無となると共に、單に性質の場所となつて、物といふ如きものは消失するのであるが、對立的無は尙有の意義を有するかぎり、前に有であつた場所は潛在を以て滿たされる。卽ち意識的主體、意識我といふ如きものが考へられるのである。併し意識的潛在は物力の潛在とは異ならねばならぬ。意識的潛在は動的意味の潛在である、物理的には無なるものゝ潛在である。單なる有の場所から否定的無の場所に入るに從つて、種々なる合目的的世界が考へられる、所謂非實在的なる意味が實在性を有つて來るのである。之を存在性を失ふと考へるが、唯有るものは何かに於てあるといふ場所の意義が變じて來るのである、存在の根柢を成す一般者が失はれる譯ではない。場所が無となる時、アリストテレスの云つた如く、現實が潛在に先立つ、形相が質料に先立つといふ意味が明になつて來る。潛在的質料と考へられるもの

は、却つて直接の現實的形相と見ることができる。右の如く、對立的無の場所に於ては、所謂意識の野に於ての如く尙一種の潛在を見るのであるが、更に眞の無の場所に於ては、意識の野に於ての如き潛在も消え失せねばならぬ、意識一般の立場に於ては意識現象も對象化せられねばならぬ、所謂意識我も之に於てあるものでなければならぬ。すべての意義に於て働くといふものはなくなる、力といふ如きものはなくなる、判斷作用其者すら對象化するのである。是に於て我々は如何なる意義に於ても眞實在を認めることはできぬ、物自體は不可知的といふの外はない。個物的實在といふも、時空の形式によつて統一せられた認識對象たるに過ぎない。併し意識一般が知識の客觀性を維持するといふには、その根柢に超越的なるものがなければならぬ。カントが經驗內容の制約に知識の客觀性を求めた如く、知識の客觀性の基には、却つて非合理的なるものがなければならぬ。而もかゝる意味に於て超越的なるものは、所謂物の如きものであつてはならぬ、又力の如きものであることもできない。それ等はすべて認識主觀によつて對象化せられたものである。之を潛在といふこともできぬ、何となれば潛在は既に力の範疇を豫想するからである。此故にそれは如何なる意味に於ても、之を對象化して知識的に限定することはできない、知識は却

つてその限定によつて成立するものでなければならぬ。何處までも限定することができないといふ意味にては無であるが、而もすべての有は之に於てあるものでなければならぬ。認識の形式が質料を構成するといふのは、時に於ける構成作用と同樣ではない。意識一般の超越性は形式も質料も之に於てある場所の超越性である、一般的なるものが一般的なるものゝ底に、內在的なるものが內在的なるものの底に、場所が場所の底に超越することである、意識が意識自身の底に沒入することである、無の無であり、否定の否定である。若し眞に判斷作用を超越し主語となつて述語となることなき本體を求むるならば、之を措いて外にない、最後の非合理的なるものであつて、而もすべての合理的なるものは之に於てあるのである。感覺的實在としての物の非合理性の根柢は要するに此にあるのである。物が空間に於てあると考へられる時、場所が物に對して全き無と考へられるが故に、單に非合理的なるものとして、個々獨立的存在の意義を有する。之に反し力に至つては、場所が有の意義を有するが故に、一且此の如き個々獨立的存在性を失ふと考へられるが、更にその後に力の主體を考へざるを得ない是に於て我々の思惟は矛盾に陷るのである。場所が眞に無なる時、かゝる矛盾は消失して我々は復空間に於ける物の如き個々獨立的存在を

見る。而して翻つて考へて見れば、前の存在性の根柢も實は此にあつたのである、所謂感覺的實在の根は此から生じて居たのである。何故に此に到つて再び物が空間に於てある如き存在の意味を得るかと云ふに、場所が絶對の無となるが故である、場所が自己に於て有るものを絶對的に越えて居るからである。此故に一方から見れば、すべての働きを超越して單に永遠なるものと考へられねばならぬと共に、一方から見れば、すべての場所を含むが故に、無限に働くものと考へられねばならぬ、卽ち一言に云へば、自由を以て屬性とするものである。眞に知る我は働く我を超越するのみならず、所謂知る我をも知るのである、我々の人格の根柢には此の如き意味に於ける實在の意義がなければならぬ、卽ち無から有を生ずるものがなければならぬ、質料をも作ると云ふべきものがなければならぬ。對立的無の場所といふ如きものが全然消え失せると共に、かゝる無の場所との關係に於て見られる作用といふ如きものも消え失せねばならない。作用といふものがその於てある場所を失ひ、その實在性を失ふと共に、現實に對する潛在といふ如きものもなくならなければならぬ。有るものは唯純粹性質ともいふべきものである、性質の背後に物があるのではなく、物の背後に性質があるのである、性質の背後に力があるのではなく、力は一つの屬性とな

るのである。現實の後に潛在があるのではなく、現實の此方に潛在があるのである。構成的範疇の對象界の背後に見らるゝ反省的範疇の對象界とは此の如き純粹性質の世界でなければならぬ。一般概念的なるものを場所とする考を何處までも徹底し而してその場所が絕對的無となる時、之に於いてあるものは純粹性質といふ如きものでなければならぬ。元來構成的範疇と反省的範疇とは離すべきものではなく、一つのものの兩面とも云ふべきものでなければならぬ。構成的範疇を具體的として反省的範疇をその萎縮せる抽象的一面と考へるならば、後者の世界は單なる抽象的思惟の世界となるが、構成的範疇の背後に反省的範疇を見、前者が後者の特殊化せるものとするならば、意志の世界となるのである。意志と判斷とは構成的範疇と反省的範疇とは、孰を表とし何を裏となすかによつて異なると考へることができる。純粹性質といふ如きものを實在の根柢と考へるには、多くの異論があるでもあらうが、我々に眞に直接なるものは、純粹性質といふ如きものでなければならぬ。それは心理學者の所謂感覺の如きものでないのは云ふまでもなく、一瞬の過去にも返ることなき純粹持續といふ如きものでもない。純粹持續といふ如きものは尙時を離れたものとは云へない、更にかゝる連續をも越えたものでなければならぬ。それは永

遠に現在なる世界、眞の無の場所に於ける有である。否定の立場が意識の立場であり、意識の場所が我々に最も直接なる內面的場所と考へ得るならば、此の如き場所に於てあるものが眞に直接なるものと云はねばならぬ。我々は此の上に物の世界、力の世界を構成するのみならず、意志の世界も構成するのである。自由を屬性とするカントの叡智的性格といふ如きものも、此の如き意味に於ける有でなければならない。判斷の主語となるものが場所となる時、性質を有する物といふ如きものは消失して主體なき作用となる更に場所其者も無となる時、作用といふ如きものも消え失せて、すべてが影像となる。主語となつて述語となることなき主體が無となるが故に、判斷の立場から云へば本體なき影像といふの外はない。本體といふものは何處にも求めることはできない、唯自ら無にして自己の中に自己の影を映すものあるのみである。強いて知識の立場から云へば客觀的ポストゥラートと云ひ得るのみである。併し一方から云へば、眞に無の立場に於ては所謂無其者もなくなるが故に、すべて有るものはそのまゝに有るものでなければならぬ。有るものがそのまゝに有であるといふことは、有るがまゝに無であると云ふことである、卽ちすべて影像であるといふことである。有るものを斯く見るといふことが、物を內在的に見ることで

あり、實在を精神と見ることである。他に之を映す無の場所なきが故に、一々が自ら映す自己でなければならぬ。此立場に於ては、作用といふものも影像に過ぎない。潜在といふも、かゝる有の背後に見られるのではなくその上に描かれたる陰影に過ぎない、有の中に含まれて居るのである。無から有を作るといふのは映す鏡をも映すといふことに外ならない。質料は一つの作用の方向によつて逆に限定せられた質料ではなく、質料自身も一種の形相となるのである。作用の背後にあるものを映す鏡そのものも映されることによつて、潜在も現實となり、質料も働くものとなる、之を無から質料を作ると云ふのである。作るといふのは時に於て作るのではなく、見ることである、眞の無の鏡の上に映すことである。我々の意志は此の如き意味に於て見るのである。見るとか映すとかいふのは譬喩に過ぎないと考へられるかも知らぬが、包攝判斷に於て主語が述語の中にあるといふことが、映すとか、見るとかいふことの根本的意義に外ならない。述語的なるものが映す鏡であり、見る眼である。かゝる判斷意識の根本的性質は、意識の一種たる意志の根柢にもなければならぬ、判斷も意志も無の場所の樣相である。現象學者は知覺の上に基礎づけられたる作用の底にも直覺があり、知識はこれに向つて充實せられて行くと云ふが、知識の基礎と

なる直覺は意識せられた意識であつて、意識する意識ではない。眞に意識する意識、卽ち眞の直覺は作用を基礎附け行くことによつて變じ行くのではなく、却つて作用は之に於て基礎附けられねばならぬ。作用の基礎附、それ自身が一種の充實的方向を有つて居るのである。情意の客觀的對象界を認めないならば、作用の基礎附の充實といふ如きことは無意義であるが、知覺を基礎としてその上に自然界が建てられるといふ時、その根柢となる直覺は知覺的直覺の上に何物かゞ加はつたものではなく、新しい綜合的直覺でなければならない、直覺が直覺自身を充實し行くのである、私の所謂場所が場所自身を限定し行くのである。此故に意志の自覺なくして自然界のアプリオリは成立することはできない。所謂直覺の背後に更に意識を考へるといふには尙論ずべき點があるであらうが、私は矛盾の意識も既に所謂直覺を一歩越えた意識でなければならぬと思ふ。私の所謂場所が限定せられ得るかぎり、卽ち一般概念が對象化せられ得る限り、知識の範圍に屬するが、之を越ゆれば判斷はその限定作用を失つて意志の世界に入る。矛盾の意識は判斷の意識から意志の意識への轉回を示すものである。此の如き判斷的知識の背後の意識、卽ち眞の無の場所といふべきものは、何處までも失はれるものではない。その窮極に於て意志をも越えて、

上に云つた如き純粹狀態の直觀に到る。此時、我々は再び矛盾の意識の超越を見る、前者は判斷の矛盾の超越であり、後者は意志の矛盾の超越である。意志の矛盾を超越することによつて我々は眞の無の立場の極限に達するのである

四

上に述べた所に於て、私は叡智的實在と自由意志との差別及び關係の問題に觸れたが、自由を狀態とする叡智的實在と自由意志とは如何なる關係に於て立つか。自由意志の主體といふ如きものが最高の主體とも考へられるであらうが、意志の自由とは行爲の自由を意味し、行爲の自由といふことが些かでも作用との關係に於て考へられるならば、尙全然對立的有無の場所を超越することはできない。我々はいつでも對立的無の場所に於ける意識作用に卽して、自由意志を意識するのである。更に此立場を越えて眞の無の場所に入る時、自由意志の如きものも消滅せなければならぬ。內在的にして卽超越的なる性質は物の屬性、力の結果ではなくして、力や物は性質の屬性でなければならぬ、物や力が性質の主體ではなく、性質が物や力の主體でなければならぬ。眞の無の空間に於て描かれたる一點一畫も生きた實在である。

斯くして始めて構成的範疇の世界の背後に於ける反省的範疇の對象界を理解することができるのである。此の如きものを叡智的實在と考へるならば、それは單に働くものではなく見るものでなければならぬ。色が色自身を見ることが色の發展であり、自然が自然自身を見ることが自然の運行でなければならぬ。叡智的性格は感覺の外にあつて之を統一するのではなく、感覺の内になければならぬ、感覺の奥に閃くものでなければならぬ、然らざれば考へられた人格に過ぎない、それは感ずる理性でなければならぬ、對立的無の場所たる意識の立場に於ては、それは物の空間に於ける如く單なる存在と見ることができる。而して物が力を有つと考へられる如く、叡智的實在は更に意志を有つと考へることができる。

空間に於ける物は内在的なるものゝ背後に考へられた超越者である。性質的なるものを主語として之れを合理化する時、空間は合理化の手段となる、すべて現れるものは空間に於て現れるのである、空間が内在的場所となる、空間的といふことが物の一般的性質として、すべてが一般概念の中に包攝せられるのである。空間的直覺の上に立つ時、性質的なるものは非合理的なるものとして、超越的根據を有つものでなければならぬ。元來、性質的なるものゝ根柢には、ベルグソンが純粹持續によつて

明にした如く、無限に深きものがある。而しく斯く性質的なるものゝ根柢が深く見られるのは、眞の無の場所に於ける直接の存在は純粹性質ともいふべきものなることを意味するのである。空間といふ如き限定せられた場所からしては、何處までも量化することのできない超越的なるものと云ふの外はない。併しかゝる超越的なるものを內在化しようといふ要求より力の考が出て來る、我々は一層直覺を深めて行くのである。直覺を深めるといふのは、眞の無の場所に近づき行くことである。現象學的に云へば、作用を基礎附けて行くと云ふのであらうが作用は「作用の作用」の上に於て基礎附けられるのである、而して作用の作用は眞の無の場所でなければならぬ。之を非合理的なるものを合理化すると云ひ得るであらう、主語となつて述語となることなき主體が述語化せられ行くことである。是において向に場所と考へられた空間は如何なる地位を取るであらうか。性質的なるもの自己に超越的なるものを自己の中に取り入れようとする時、空間其者が性質的なものとならねばならない、空間は力の場とならなければならない、空虛なる空間は力を以て滿たされることゝなる。色もなく音もなき空間がすべてを含む一般者となり、色や音は空間の變化より生ずると考へられるのである。力といふのは場所が之に於てあるものを內

面的に包攝しようとする過程に於て現れ來る一形相である。此故に判斷や意志と同一の意義を有つて居るのである。物理的空間は何處までも感覺的でなければならぬ、感覺性を離るれば物理的空間はなく、單に幾何學的空間となる、而して力は亦數學的範式となるの外はない。感覺の背後に考へられる超越的なる主體が、無限大にまで打ち延ばされることによつて、前に單に場所と考へられた空間と合一し力の場となるのである。非合理的なるものを內に包む意志の立場から云へば、此の如き場所は既に意志の立場と云ひ得るであらう。此故に力の概念は意志の對象化によつて生ずる、物の底に意志を入れて見ることによつて生ずると考へられるのである。無なる意識の場所と、之に於てある有の場所との不合一が力の場所を生ずる、有の場所から眞の無の場所への推移に於て力の世界が成立するのである。有るものゝ場所となるものが亦限定せられた有であるかぎり、我々は力といふものを見ることはできない。例へば物體といふものを考へる場合、我々は何等かの性質的なるものを基礎として、之に他の性質的なるものを盛るのである、觸覺筋覺といふごときものが先づ此の如き基礎として擇ばれるものである。物體といふものが考へられるには、何處まで行つてもかゝる基礎となるものを除去することはできない。超越的なる

物といふ考は、却つて內在的性質を限定して之に他の性質を盛らうとするより起るのである、限定せられた場所の中に、場所外のものを入れようとするより起るのである。かゝる意味に於ては、物を考へる場合でも、判斷は自己の中に自己を超越するといふことができる。此の如き主體となる性質を何處までも押し進めて行けば、遂に最も一般的なる感覺的性質となる。物質の概念は斯くして成立するのである。物質は直接に知覺すべからざるものと考へられるが、それは特殊なる知覺對象ではないといふに過ぎない。知覺の水平線を越えては物質といふものはない。特殊なる性質の背後に何處までも一般的なるものを見て行くといふことは、之を一般化して行くことであり、その最後に於て一般的なるものが私の所謂場所となる。知覺とは直接に限定せられたものを意識することであると考へられる如く、限定せられた場所の意義は最後まで脫することはできない。無の場所に於ける有の場所の限定といふことが、知覺といふことでなければならぬ。而して限定せられた有の場所、卽ち知覺の範圍に留まる間は、力の世界を見ることはできぬ。限定せられた性質の一般概念の中に於ては、單に相異なるもの、相反するものを見るのみである。力の世界を見るには、かゝる限定せられた一般概念を破つて、その外に出なければならぬ、相反の

世界から矛盾の世界に出なければならぬ。此回轉の一點こそ最も注意すべきである。矛盾的統一の對象界を考へるには、その根柢には直覺がなければならぬ。數學的眞理の如きものゝ根柢には一種の直覺のあることは、何人も認めるであらうが、之を色や音の如き所謂感覺的直覺とは同じとは考へない。併しすべて判斷の根柢には一般的なるものがあるとするならば、色や音についての判斷も一般者の直覺に基いて成立するのである。感覺的なるものの知識の根柢に於ける一般者と、所謂先驗的眞理の根柢に於ける一般者とは如何に異なるか。矛盾關係に於て立つ眞理を見るには、我々は所謂一般概念の外に出て之を見るといふことがなければならない。所謂一般的なるものが見られ得るといふことが、先驗的知識の成立する所以である。之によつて我々は斯くなければならぬ、然らざれば知識は成立せないと云ひ得るのである。既に一般概念の外に出ながら、如何にして更に判斷の根柢となる一般的なるものを見ることができるであらうか。一般概念の外に出るといふのは、一般概念が失はれることではない、却つて深くその内に底に徹底することである、限定せられた有の場所から、その根柢たる眞の無の場所に到ることである、有の場所其者を無の場所と見るのである、有其者を直に無と見るのである。斯くして我々はこれまで有

であつた場所の内に、無の内容を盛ることができる、相異の關係に於てあつたものゝ中に矛盾の關係を見ることができる、性質的なるものゝ中に働くものを見ることができるのである。我々の見る知覺的空間は直に先驗的空間ではない。併しそれは先驗的空間に於てあるのである、而して先驗的空間の背後は眞の無でなければならぬ。無の場所に於てあると云ふことが、意識を意味するが故に、それは先驗的意識に於てあると云ふことができる。是故に一般概念の外に出るといふことは、却つて之によつて眞に一般的なるものを見ることである。先驗的空間といふ如きものは、此の如き一般者を云ひ表したものである。此の如き立場に於ては見るといふことは、單に記載することではなく、構成することである。眞の直覺はその充實の極限に達し對象と合一するといふことができるのである。右の如き極致に達せない間は、知識は單なる記載以上に出ることはできぬ。現象學的立場といへども、意識は尙對立的無の場所を脱せないのである、考へられた一般概念の外に出ることができないのである。現象學者の作用といふのは、一般概念の埒によつて圍まれた作用である、對象の一範圍といふ如きものに過ぎない。是故に内に對象の構成を見ることができず、外に作用

と作用との關係を見ることもできない。作用其者の充實といふ如きことは現象學の立場に於て現れて來ないのである。アリストテレスは感覺とは封蠟の如く、質料を離れた形相を受取るものであると云ふが質料なき形相を受取るものは形相もないものでなければならぬ。斯く受取るとか、映すとかいふことが、何等かの意味に於て働きを意味するならば、それは働くものなくして働き、映すものなくして映すと云いふことでなければならぬ。映れるものを形相とするならば、それは全く形相なき純なる質料と考ふべきであらう。之に反し、映された形相を特殊なるものとして、質料と考ふるならば、それは形相の形相として純なる形相とも考へ得るであらう。かゝる場合、我々は直に映すものと映されるものと一と考へるのであるが、その一とは如何なるものを意味するのであらうか。その一とは兩者の背後にあつて兩者を結合するといふことではない、兩者が共に內在的であつて、而も同一の場所に於て重り合ふといふことでなければならぬ。此の如き考は素朴の樣ではあるが、種々なる音が一つの聽覺的意識の野に於て結合し、各各の音が自己自身を維持しつゝも、其上に一種の音調が成立すると同樣である。ブレンターノが「感官心理學」に於て云つて居る樣に現象的に結合するのである。唯、我々は感覺には意識の野を考へるが、思惟に

は之を認めないから、思惟の場所に於て重り合ふといふ語が一種の譬喩の如くに思はれるのである。併し我々の思惟の根柢に一つの直覺があるとするならば、感覺や知覺と同じく思惟の野といふ如きものが考へられねばならぬ。然らざれば現象學者の直覺的內容の充實的進行といふ如きものは考へられないのである。我々は却つて物が重り合ふと云ふことを、その一つの場合と考へ得るであらう。思惟の野に於て重り合ふといふのは、一般なるものを場所として、その上に特殊なるものが重り合ふことである。聽覺の場合に於ては、個々の音の集團を基礎として、之に音調が加はると考へ得るでもあらう。併し眞の具體的知覺に於ては、個々の音が一つの音調の要素として成立する、卽ち之に於てあると考へ得るでもあらう。空間に於ては、一つの空間に於て同時に二つの物が存在することはできないが、意識の場所に於ては、無限に重り合ふことが可能である。我々は限りなく一般概念によつて限定せられた場所を越えて行くことができるのである。我々が個々の音を意識する時、個々の音は知覺の場所に於てある。その上に音調といふ如きものが意識せられる時、音調も亦同一の意識の場所に於てある。各々の音が要素であつて、音調は之から構成せられて居るといふのは、我々の思惟の結果であつて、知覺其者に於て個々の音は音調に

於てあるのである。併し音調も亦一つの要素として、更に他の知覺に於てあることができる、音も色も一つの知覺の野においてあるといふことができる。斯くして知覺の野を何處までも深めて行けば、アリストテレスの所謂共通感覺 sensus communus の如きものに到達せなければならぬ、それは單に特殊なる感覺的內容を分別するものである。分別すると云へば、直に判斷作用を考へられるのであるが、判斷作用の如く感覺を離れたものではない、感覺に附着して之を識別するのである。此の如きものを私は場所としての一般概念と考へるのである。何となれば、所謂一般概念とは此の如き場所が、更に無限に深い無の場所に映されたる影像なるが故である。知覺が充實して行くといふのは、此の如き場所としての一般者が自己自身を充實し行くことである。その行先が無限であつて、無限に自己を充實して行くが故に作用と考へられる、而してその限なき行先は志向的對象 intentionale Gegenstände として之に含まれると考へられるのである。併しその實は之に含まれるのではなく、此の如き無限に深い場所に於てあると云ふことを意味するのである。直覺といふのも、かゝる場所が無限に深い無であることを意味するに外ならない。斯くその底が無限の無なるが故に、意識に於ては、要素と考へられるものをその儘、その上に全體が成立するので

ある。現象學派に於て作用の上に作用を基礎附けると云ふが、作用と作用とを結合するものは所謂基礎附ける作用ではなくして、私の所謂「作用の作用」といふ如きものでなければならない。此場所に於ては作用は既に意志の性質を含んで居るのである、作用と作用との結合は裏面に於ては意志であると云つてよい。併し意志が直に作用と作用とを結合するのではない、意志も此場所に於て見られたものである、此場所に映されたる影像に過ぎない。意志も尙一般概念を離れることはできない、限定せられた場所を脫することはできない。直覺は意志の場所をも越えて深く無の根柢に達して居る。一般の中に特殊を包攝して行くことが知識であり、特殊の中に一般を包攝することが意志であり、この兩方向の統一が直觀である。特殊の中に一般を包攝するといふのは背理の樣であるが、主語となつて述語となることなき本體といふ如きものが考へられる時、既に此意味が含まれて居なければならぬ。現象學に於て知覺が充實して行くといふのも、此方向に向つて進み行くのである。此の方向に於ては基礎附ける作用も、基礎附けられる作用も、一つの直覺の圈內の中に入つて行く、卽ち共に無の場所に於てあるのである。直覺に分限線はない、知覺といふ作用を限る時、既に一般概念によつて直覺の場所を限定して居るのである。現象學者が

知覺作用に生きるといふ時、既に範疇的直覺も含まれて居なければならぬ、我の全體がそこにあるのである、私は之を無の場所に於てあると云ひたい。此故に知覺的經驗を主語として、所謂經驗界が成立するのである。知覺作用として限定せられた直覺は、既に思惟によつて限定せられた直覺である。我々が知覺に生きるといふ時、知覺は思惟の上に重り合ふのである、知覺的なるものがその底の場所に映つたものが、その一般概念となる。我々が知覺的直覺といふ如きものを限定して見ることのできるのは、或一つの意識作用が或一點から出立し、また元に還ることが可能と考へられるが故である。一つの平面に於ては、或一の點から無限の果を廻つても、亦元の點に還ることが可能でなければならぬ。或は之を一つの意識面がそれ自身の内に中心を有つとも云ひ得るであらう。無限なる次元の空間とも考へ得べき眞の無の場所に於て、此の如き一平面を限定するものは一つの一般概念でなければならぬ。知覺の意識面を限定する境界線をなすものは、知覺一般の概念でなければならぬ。知覺的直覺といふのは斯くして限定せられた場所である。我々が知覺的直覺に於てあると考へる時、我々は一般概念によつて限定せられた直覺に於てあるのである、限定せられた場所に於てあるのである。一般概念は斯く意識面の境界線をなすが故

に、一方に於て限定せられた場所の意義を有すると共に、一方に於ては自己自身を限定する場所の意義を有つて居るのである。私が前に一般概念の外に出ると云つたのは、一般概念を離れるのではない、又之によつて一般概念が消え失せるのでもない、限定せられた場所から限定する場所に行くことである、對立的無の場所、卽ち單に映す鏡から、眞の無の場所、卽ち自ら照す鏡に轉ずることである。此の如き鏡は外から持ち來つたのではない、元來その底にあつたのである。我々が眞に知覺作用に生きるといふ時、我々は眞の無の場所に於てあるのである、鏡と鏡とが限りなく重り合ふのである。此故に我々は所謂知覺の奥に藝術的內容をも見ることができる。元來知覺の意識と判斷の意識とが離れて居るのではない。判斷の意識とは特殊なるものが一般的なるものに於てあると云ふことゝするならば、知覺的意識面とは特殊なるものゝ場所に過ぎない、而して特殊なるものは小語的概念によつて限定せられて居るのである。知覺的意識面といふのは、色とか音とかいふ如き所謂感覺の內容に定められるのではなく、一般なるものに對する特殊性によつて定められるのである。物の大小形狀は概念的に考へることもできるが、知覺的に見ることもできる。之に反し概念的なるものであつても、それが判斷の主語として與へられる時、知覺性を有

つと云ふことができる。或は知覺の底には、概念的分析を容れない無限に深いものがあると云ふでもあらう。私もそれを認めるのであるが、かゝるものゝ背後に概念を入れて見る限り、知覺と云ひ得るのである。直覺を概念の反射鏡に照して見るかぎり、それが知覺となる。眞に概念を越えたものは、もはや知識ではない、知覺を藝術的直觀の如きものと區別して、之を知識と考へ得るかぎり、それは直覺其者ではない。我々は數學者の所謂連續の如きものを見ることはできぬ、而も知覺の背後に概念を越えた何物かを見ると考へるのは藝術的內容の如きものでなければならぬ、ベルグソンの所謂唯之と共に生きることによつて知り得る內容である。知覺は概念面を以て直觀を切つた所に、成立するのである。フッサールの云ふ如く、知覺の水平面は何處までも遠く廣がるであらう。併しそれは概念的思惟と平行して廣がるのである、之を越えて廣がるのではない、何處までも之によつて圍まれて居るのである。無は何處までも有を裏打して居る、述語は主語を包んで居る、その窮まる所に到つて、主語面は述語面の中に沒入するのである、有は無の中に沒し去るのである。此の轉回の所に範疇的直覺が成立する、カントの意識一般も、かゝる意味に於ける無の場所である。かゝる轉回を私は一般概念によつて限定せられた場所の外に出ると云ふの

である、小語から大語に移り行くのである。是に於て述語的なるものが主體となると考へることができる。これまで有であつて主語面をそのまゝに述語面に沒入するが故に、特殊なるものの中に一般なるものを包攝するといふ意志の意味を含んで來るのである。

一般概念とは如何なるものであるか。一般概念とは特殊概念に對立して考へられるのであるが、特殊と一般との關係には、判斷意識といふものを考へねばならぬ。判斷とは一般の中に特殊を包攝することである。併し特殊概念は更に特殊なるものに對して、一般概念とならねばならぬ。推論式に於て媒語がかゝる位置を取るものである。論理的知識とは、此の如き無限の過程と考へられるが、何處かに一般概念といふものが限定せられるかぎり、論理的知識が成立するのである。然らば、かゝる一般概念を限定するものは何であるか。最高の一般概念は何處までも一般的なるものでなければならぬ、如何なる意味に於ても特殊なる內容を越えたものでなければならぬ。而して此の如くすべての特殊なる內容を越えたものは無に等しき有でなければならぬ。眞に一般的なるものは有無を超越し而も之を內に包むもの、卽ち自己に於て矛盾なるものでなければならぬ。推論式に於ての媒語は一方から見れ

ば大小兩語の中間に位するものと見られるが、深き意味に於ては既に此地位にあるものでなければならぬ。單に知識の立場から云へば、それは考ふべからざるものでもあらう。然らば、矛盾の意識は何によつて成立するであらうか。論理的には、それは唯矛盾によつて展開し行くヘーゲルの所謂概念の如きものを考へる外ないであらう。併し論理的矛盾其者を映すものは何であるか。それはまた論理的なものであることはできない。一度論理的なるものを越えるといふ時、矛盾其者を見るものがなければならぬ、無限なる矛盾を內容とするものがなければならぬ。私はかういふ立場を意志の立場と考へるのである。論理的矛盾を超越して而も之を內に包むものが、我々の意志の意識である。推論式について云へば、媒語が一般者となるのである。推論式に於ても、媒語が主要の位置を取つて居る。媒語が單に大語の中に含まれるとするならば、推論式も判斷の連結に過ぎない。苟も推論式が判斷以上の具體的眞理を表すものと考へるならば、媒語が統一的原理の意義を含み、大語も小語も之に於てあるのである、兩者はその兩端と考ふべきである。媒語は此場合、私の所謂意識の場所の意義を有つて來る、推論式に於て我々は既に判斷の立場から意志の立場への推移を見るのである。判斷に於ては、我々は一般より特殊に行くが、意志に於

ては我々は特殊から一般に行く、歸納法に於て既に意志の立場が加はつて居るのである。事實的判斷に於ては、特殊なるものが判斷の主語となる、特殊なるものによつて客觀的眞理が立せられる、特殊なるものゝ中に判斷の根柢となる一般的なるものが含まれて居なければならぬ。かゝる一般者は單に包攝判斷の大語と考へられる一般者とは異なつたものでなければならぬ。事實的判斷は論理的に矛盾なく否定し得ると考へられる如く、その根柢には所謂論理的一般者を越えて自由なるものがなければならぬ。私が此に意志の立場の加入を考へる所以である。意志は單に偶然的作用ではなく意志の根柢には作用自身を見るものがなければならぬ、作用其者の方向を映すものがなければならぬ、唯所謂一般概念的限定を越えた所に意志の意識があるのである。作用に對して自由と考へられるのは、作用とは一般概念によつて限定せられたものなるが故である。判斷の立場から意志の立場に移り行くといふのは、有の場所から無の場所に移り行くことである。有と無と相對立すると考へる時、兩者を對立的關係に置くものは何であるか。主觀的作用から見れば、我々は有から無に、無から有に思惟作用を移すことによつて兩者を對立的に考へ得るでもあらう。併し客觀的對象から見れば、有が無に於てあるといふことである、思惟の對象

界に於て限定せられたものが有であり、然らざるものが無と考へることができる。思惟の對象界がそれ自身に於て一體系を成すと考へるならば、無は有よりも一層高次的と考へることができる。無も思惟對象である、之に何等かの限定を加へることによつて有となる、種が類に含まれるといふ意味に於て有は無に於てある。無論、無と考へることは既に一つの限定せられた有であつて、その以前に更に無限定のものがなければならぬと云ひ得るであらう、而して之に於て有と無とが對立的關係に於てあると考へることもできるであらう。併し無を有と對立的に見る立場は、既に思惟を一歩蹈み越えた立場である所謂有も無も之に於てある作用の作用の立場でなければならぬ。判斷作用の對象として考へられた時、肯定的對象と否定的對象とは排他的となるが、轉化の上に立つ時、作用其者は兩方向を同樣に眺めることができる。併し措定せられた對象界から見れば、赤の表象自體は色の表象自體に於てある如く、有は無に於てある、物は空間を排するのではなく、物は空間に於てあるのである。働くものといへども、それが働くものとして考へられる以上、それが於てある場所が考へられねばならぬ、一般概念によつて統一せられ得るかぎり作用といふものが考へられるのである。作用自身を直に對象として見ることはできない、一般の中に無限

に特殊を含み一般が單に於てある場所と考へられる時、純粹作用といふ如きものが見られるのである。斯く考へれば一つの立場から高次的立場への接觸は、直線と孤線とが一點に於て相接する如く相接するのではなく、一般的なるものと一般的なるものと、場所と場所とが無限に重り合つて居るのである、限りなく圓が圓に於てあるのである。限定せられた有の場所が限定する無の場所に映された時、卽ち一般なるものが限なく一般的なるものに包攝せられた時、意志が成立する。限定せられた有の場所から見れば、主語となつて述語とならない本體は、何處までも此場所を超越したものであり、無限に働くものとも見られるであらう。併し意識するといふことは無の場所に映すことであり、此場所から見れば、逆に內面的なる意志の連續に過ぎない。限定せられた有の意義を脫しない希臘哲學の形相より出立すれば、何處までも質料を形相化し遂に純なる形相に到達するも、尙質料が眞に無となつたのではない、唯極微的零に達したまでである、質料は尙動くものとして殘つて居る。眞の無の場所に於ては、一から一を減した眞の無が見られねばならぬ。此に於て我々は始めて眞に形相を包む一者の立場に達したと云ひ得る、極微的質料もその發展性を失ひ眞に作用を見るといふことができる。トーマスの如く善を知れば必ず之を意志する

といふ時、我々は尙眞の自由意志を知ることはできない、眞の意志はかゝる必然をも越えたものでなければならぬ。ドゥンス・スコートゥスの如く意志は善の知識にも束縛せられない。至善に對しても意志は尙自由を有すると考へられねばならない。思惟の矛盾は思惟としてはその根柢に達することであり、ヘーゲルの哲學に於ての樣に理性に於ては此以上のものを見ることはできないのであるが、我々の心の底には矛盾をも見るもの、矛盾をも映すものがなければならぬ。イデーがその自己自身の外に出て自然に移らねばならないのは之に由るのである。右の如く場所が場所に於てあり、眞の無の場所から之に於てある有の場所が見られた時、意志作用が成立すると考へられるならば、一般概念とは無の場所に於て、限定せられた有の場所の境界線と考へることができる。平面に於ける圓の點が內部に屬すると見ることができると共に、外部に屬すると見ることができる如く、一つのものが感覺に卽して限定せられた有の場所と見られると共に、無の場所に卽して一般概念と考へられるのである。限定せられた場所が無の場所に於て遊離せられて所謂抽象的一般概念となる。一般概念の構成作用、所謂抽象作用には、意志の立場が加らねばならぬ。こゝにラスクの云ふ如き主觀の破壞が入つて來るのである。

前に云つた如く、フッサールの知覺的直覺といふのは一般概念によつて限定せられた場所に過ぎない。眞の直覺はベルグソンの純粹持續の如く生命に充ちたものでなければならぬ。私はかゝる直覺を眞の無の場所に於てあると考へるのである。無限に廣がる知覺的直覺面を圍むものは、一つの一般概念でなければならぬ。知覺的直覺といふものが考へられる時、知覺作用といふものが考へられねばならぬ。作用といふものが考へられるには私の所謂「作用の作用」の立場から作用自身の反省がなければならぬ。作用其者を直に見るといふことはできない、一つの作用が他の作用と區別して見られるには、一つの一般概念によつて限定せられた場所が見られねばならぬ。述語的なるものが主語の位置に立つことによつて働くものが見られるのである。知覺の水平面は無限に遠く廣がると思はれるが、それは無限に深き無の場所に於て限定せられた一般概念の圏外に出でない。一般概念といふのは、有の場所が無の場所に映れるものに過ぎない、有の場所と無の場所と相觸れ合ふ所に概念の世界が成立するのである。併し單に有を超越し有が之に於てあると考へられる否定的無は、尙眞の無ではない。眞の無に於ては、かゝる對立的なる無も之に於てあるのである。限定せられた有が直に眞の無に於てあると考へられる時、知覺作用が

成立つ、かゝる無が更に無に於てあると考へられる時、判斷作用が成立するのである。すべて作用といふのは一つの場所が直に眞の無の場所に於てあると見られる場合に現れるのである、種々なる作用の區別や推移が意志の立場に於て見られ得ると考へられるのは此故である。有が無に於てあるが故に、作用の根柢にはいつでも一般概念なるもの、述語的なるものが含まれて居る。併しそれは單に對立的無に映されて居るのでなく、直に眞の無に於てあるが故に、遊離せる抽象的概念ではなくして、內在的對象となる。內在的對象とは眞の無の場所に固定せられた一般概念である。作用は必ず內在的對象を含まねばならぬと考へられるが、却つて內在的對象に於て作用があるのである、內在的對象として限定せられた場所によつて作用が見られるのである。眞の無の場所は有と無とが重り合つた場所なるが故に、作用の對象は何處までも對立的でなければならぬ。對立的ならざる對象を含むと考へられるもの、例へば知覺の如きものは、嚴密なる意味で作用ではない、尙一般概念を以て圍まれたる有の場所たるに過ぎない、未だ場所が直に無に於てあるとは云はれない。唯判斷作用の如きに至つては明にかゝる對象の對立性が現れる。判斷のすぐ後に意志がある、判斷意識は有が直に無に於てあることによつて現れるのである。アリストテ

レスの共通感覺を押し進めてカントの意識一般に至るには、有から無への轉換の意味がなければならぬ。無論知覺といへどもそれが意識と考へられる以上、對立を含んで居るであらう。對立によつて意識は成立するのである。意識の野に於て對象が重り合ふと考へられるのも、實は之によるのである。有の場所が直に眞の無の場所に於てある時、我々は純なる作用の世界を見る、普通に意識の世界と考へられるものは此の如き世界を意味して居る。併し此の如き世界は、尙內在的對象といふ如き一般概念によつて限定せられた一つの對象界たるを免れない。內在的對象と考へられるものは、無を以て緣附られた有の場所である、或は對立的無によつて限定せられた眞の無の場所である。眞の無の場所は尙之より深きものでなければならぬ、尙之を越えて廣がるものでなければならぬ、かゝる場所も之に於てあるものでなければならぬ。是に於て我々は初めて意志の世界を見るのである。知識的對象としては有と無との合一以上に出ることはできない、主語と述語との合一に至つて知識はその極限に到達する。併しかゝる合一を意識する時、かゝる合一が於てある意識の場所がなければならぬ。有るものは何かに於てあると云ふ時、同一なるものも、於てある場所がなければならぬ。同一の裏面に相異を含み、相異の裏面に同一を含むと

いふのは此の如き場所に於てでなければならぬ。有と無と合一して轉化となる時、轉化を見るもの、轉化が於てある場所がなければならぬ。然らざれば轉化は轉化したもの、卽ち或物として止められ、更に矛盾的發展をなすことはできぬ。矛盾の發展には矛盾の記憶といふ如きものがなければならぬ。單に論理的判斷の立場から見れば、それは唯矛盾から矛盾に移り行くことであらう、その統一として單に自己自身に於て無限に矛盾を含むものを考へる外はない。併し斯く考へることは、尙判斷の主語を外に見ることであり、眞に述語的なるものが主語となることではない、限定せられた場所として意識の野を見て居るのである。ヘーゲルの理性が眞に內在的であるには、自己自身の中に矛盾を含むものではなく、矛盾を映すもの、矛盾の記憶でなければならぬ、最初の單なる有はすべてを含む場所でなければならぬ、その底には何物もない、無限に廣がる平面でなければならぬ、形なくして形あるものを映す空間の如きものでなければならぬ。自己同一なるもの否自己自身の中に無限に矛盾的發展を含むものすら之れに於てある場所が、私の所謂眞の無の場所である。或は前者の如きものに到達した上、更に於てある場所といふ如きものを考へる要はないと云ふでもあらう。併し前者は判斷の主語の方向に押し詰めたものであり、後者はその

述語の方向に押し詰めたものである。內在的といふことが述語的といふことであり、主語となつて述語とならない本體も、それが內在的なる限り知り得るとするならば、後者から出立せなければならぬ、後者を最も深いもの、最も根本的なるものと云ひ得るであらう。從來の哲學は意識の立場について、充分に考へられてない。判斷の立場から意識を考へるならば、述語の方向に求めるの外はない、卽ち包攝的一般者の方面に求めるの外はない。形式によつて質料を構成すると云ひ、ロゴスの發展と云ふも、之れより意識するといふことを導き出すことはできぬ。我々は一切の對象を映すものを述語の極致に求めねばならぬ。苟も意識するものといふものを考へた時、それは既に意識せられたもので意識するものではない。アリストテレスは變するものはその根柢に一般的なるものがなければならぬといふが、かゝる一般的なるものが限定せられた有限の場所であるかぎり、變ずるものが見られ、それが極微であるかぎり、生滅するもの純粹作用といふものが見られるのであるが、唯全然無となつた時、單に映す意識の鏡といふ如きものが見られねばならぬ。一より一を減いた眞の零といふものが考へられるかぎり、單に映す意識の鏡、私の無の場所といふものも、論理的に考へられねばならぬ。純なる作用の根柢をなすもの、希臘人の所謂純粹な

る形相といふ如きものも、一層深き無の鏡に於ては、遊離されたる抽象的一般概念ともなるのである。我々は主客對立の立場から考へる故に、一般概念は單に主觀的と考へられるのであるが、抽象的一般概念を映す意識の鏡は所謂客觀的對象を映すものをも包んで、尙深く且つ大なるものでなければならぬ。而してそれは眞に無なるが故に、我々に直接であり、內面的である。判斷の述語的方面をその極致にまで押し進めて行くことによつて、卽ち云はば述語的方向に述語を超越することによつて、單に映す意識の鏡が見られ、之に於て無限なる可能の世界、意味の世界も映されるのである。限定せられた有の場所が無の場所に接した時主客合一と考へられ、一步進んで純粹作用といふ如きものが成立する。判斷作用の如きもその一であつて、一々の內容が對立をなし、所謂對立的對象の世界が見られるのであるが、更に之を踏み越えた時、單に映された意味の世界が見られるのである。我々の自由意志は、かゝる場所から純なる作用を見たものである。此故に意志は判斷を裏返しにしたものである述語を主語とした判斷である。單に映す鏡の上に成立する意味はいづれも意志の主體となることができる、意志が自由と考へられる所以である。意志に於て特殊なるものが主體となると考へられる、意志の主體となる特殊なるものとは、無の鏡に映

されたものでなければならぬ、限定せられた一般概念の中に包攝せられる特殊ではなく、かゝる有の場所を破つて現れる一種の散亂である。

以上述べた所は一般概念によつて圍繞せられた有の場所を破つて、單に映す鏡とも云ふべき無の場所があり、意志は此場所から有の場所への關係に於て見られ得ることを論じ、未だ單に之に於てあるものに論及することができなかつた。意志は眞の無の場所に於て見られるのであるが、意志は尙無の鏡に映された作用の一面に過ぎない。限定せられた有の場所が見られるかぎり、我々は意志を見るのである。眞の無の場所に於ては意志其者も否定せられねばならぬ、作用が映されたものとなると共に意志も映されたものとなるのである。動くもの働くものはすべて永遠なるものの影でなければならない。

五

知覺、思惟、意志、直觀といふ如きものは、嚴密に區別すべきものたると共に、相互に關係を有し、その根柢に此等を統一する何物かがなければならぬ。かゝるものを掴むことによつて、此等のものゝ相互の區別及び關係が明にせられるのである。意識作

用としては、此等の外に尙記憶、想像、感情など多く論ずべきものがあるであらうが、今は右の四つのものに止めて置く。知識の立場から見て最も直接にして內在的なるものは、判斷であらう、判斷として最も根本的なるものは包攝判斷である。包攝判斷とは一般なるものゝ中に特殊なるものを包攝することである。包攝するといふのは、特殊なるものを主語として、一般なるものを之れについて述語すると云ふことである。包攝すると云へば、すぐ作用といふ如きものが考へられるのであるが、かゝる複雜なる概念を交へないで、概念の一般と特殊といふことが、すぐに包攝的關係に於てあると云ふことである。關係といへば、對立せる二つのものが考へられるのであるが、二つのものが對立的に考へられるには、二つのものが、共同の一般的なるものに於てなければならぬ。此意味に於て包攝的關係といふものが關係としても亦最も根本的と云ひ得るであらう。判斷作用といふものから時間的意義を除去すれば、その根柢に殘るものは唯かゝる包攝的關係のみである。或は何等かの意味に於て時間的關係を入れないで、作用といふものを考へ得ないと云ふでもあらう。併し判斷作用といふのは、かゝる包攝的關係の根柢に於てのみ考へ得るのである。かゝる包攝的關係から直に變するとか、働くとかいふことの出て來ないのは云ふまでもない。

併しかゝる包攝的關係の時間上に於ける完成として、判斷作用といふものが理解せられるのである。特殊なるものを主語として、之について一般なるものを述語するとは、如何なることを意味するか。我々は斯く考へる時、主觀客觀の對立を前提として居る。主語となるものは客觀界に屬し、述語的なるものは主觀界に屬すると考へて居る。併しかゝる對立を考へる前に、主語となるものと述語となるものとの直接の關係がなければならぬ、概念自身の獨立なる體系がなければならぬ、判斷の客觀的妥當は之によつて立せられるのである。概念の體系は如何にして自己自身を維持するか。一般的なるものが基となつて、特殊なるものを包む、特殊なるものが一般的なるものに於てあると考へることもできれば、特殊なるものが基となつて、一般的なるものを有つとも考へることができる。併し概念自身の體系として寧ろ前者を取らねばならぬ。後者に於てはもはや複雜なる關係が含まれて居る、既に主客兩界の對立といふものが考へられ、主語となるものが外に射影せられて居ると云ふことができる、然らざれば一が多を有することはできぬ。無論一般的なるものが特殊なるものを含むと考へるにも、一般的なるものが自己自身を超越すると考へなければならぬであらう。併しかく考へるのは、概念を考へられたものの如く見る故である、概

念と意識とを離して考へる故である。直接には、一般と特殊とは無限に重り合つて居る、斯く重り合ふ場所が意識である。右の如く考へるならば、判斷に於て眞に主語となるものは特殊なるものではなく、却つて一般的なるものである。全然述語的なるものゝ外にあるものは、判斷の主語となることはできない、非合理的なるものも、それが何等かの意味に於て一般概念化せられ得る限り、判斷の主語となるのである。斯く考へれば、判斷とは一般なるものゝ自己限定といふことゝなる、一般なるものは、すべて具體的一般者でなければならぬ、嚴密には抽象的一般なるものはない。無論私がこゝに判斷といふのは、所謂判斷作用の如きものを云ふのではない、單にその根柢となるものを意味するのである。希臘人の如く形相を能働的と考へるのは、眞に直接なる意識の場所に於てのみ可能である。

右の如く特殊と一般との包攝的關係から出立し、何等の假定なき直接の狀態に於ては、一般は直に特殊を含み、一般より特殊への傾向に於て判斷の基礎が置かれるとするならば、一般と特殊との包攝的關係から種々なる作用の形を考へ得ると思ふ。我々は無限に特殊の下に特殊を考へ、一般の上に一般を考へることができる。かゝる關係に於て、一般と特殊との間に間隙のある間は、かゝる一般によつて包含せられ

たる特殊は互に相異れるものたるに過ぎない。併し一般の面と特殊の面とが合一する時、卽ち一般と特殊との間の罅隙が滅する時、特殊は互に矛盾的對立に立つ、卽ち矛盾的統一が成立する。是に於て一般は單に特殊を包むのみならず、構成的意義を有つて來る。一般が自己自身に同一なるものとなる、一般と特殊とが合一し自己同一となると云ふことは、單に兩者が一となるのではない。兩面は何處までも相異なつたものであつて、唯無限に相接近して行くのである、斯くしてその極限に達するのである。是に於て包攝的關係は所謂純粹作用の形を取る。かゝる場合、述語面が主語面を離れて見られないから、私は之れを無の場所といふのである。主客合一の直觀といふのは、此の如きものでなければならぬ。無論、右の如き意味に於ける純粹作用は未だ働くもの、動くものではない、唯述語的なるものが主語となつて述語とならない本體となると云ふことである、判斷が內に超越することである、內に主語を有つことである。主客合一を單なる一と考へるならば、包攝的判斷關係は消滅し、更に述語が主體となると云ふ如きことは無意義と考へられるであらう。併し包攝的關係から押し進めて行けば、何處までも此兩者の對立がなくなる筈はない。直觀といふのは述語的なるものが主語となることである。私はすべて作用と考へられるもの

ゝ根柢を、此に求めたいと思ふ。矛盾的對立の對象に於て初めて働くものが考へられるのである。意識が純粹作用と考へられるにも、意識の根柢にかゝる直觀がなければならぬ。普通には、作用の時間的性質のみが注意せられ、單なる物理的作用と意識作用との區別が充分に注意されて居ないが、意識作用に於ては時間的變化の背後に非時間的なものがなければならぬ。無論、物理的作用の根柢にも物とか力とかいふ如く非時間的なるものが考へられねばならぬであらうが、兩種の作用の異なる所は、意識作用に於てはその根柢となるものが、判斷の立場から云へば、述語的なるものでなければならぬ。論理的進行と時間的變化とを直に同一視すべからざることは云ふまでもない。併し時間的變化といふ如きものゝ成立する前に、論理的なものがなければならぬ。矛盾せるものに移り行くことの可能、矛盾せるものの統一に時の根柢が置かれねばならぬ。意識作用が純粹作用と考へられるのも、我々の意識と考へられるものがかゝる矛盾の統一の場所なるが故である。無論、數理の如きものに於ても、述語的なるものが主語となると云ひ得るであらう。數理の統一は矛盾的統一である、併し數理が數理自身を意識するとは云はれない、論理的矛盾から意識作用は出て來ないと云ひ得るであらう。併し數理の根柢となる一般者は、尙限定せられ

た一般者である、限定せられた場所である。唯、包攝的關係に於ての一般的方向、判斷に於ての述語的方向を何處までも押し進めて行けば、私の所謂眞の無の場所といふものに到達せなければならない。無論、限定せられた一般を越えるといふ時、判斷は判斷自身を失はねばならぬであらう。併し具體的一般者といふものをその極限にまで押し進めて行けば、此に到達せざるを得ない。アリストテレスは物理學第三篇に於て、無限定なるものがすべてを含むといふパルメニデスの考に對して、無限定なるものは全體と類似するが故に斯く考へられるのであるが、無限定なるものは量の完成の質料として潜在的に全體であるが、顯現的に全體ではない、それは包むものではなく、包まれるものである、不可知的なもの、無限定なものが包むとか、限定するとかいふことはできないと云つて居る。判斷の對象としては、斯く云ふの外ないであらう。併し形相として限定せられたものが意識せられた時、それがエンテレゲーヤであるとしても、於てある場所がなければならぬ、イデヤの場所はまたイデヤたることはできない。量の分割作用によつて潜在と顯現と分たれるならば、かゝる作用自身を見るものがなければならぬ。潜在として有に包まれた無は、眞の無ではなく、眞の無は有を包むものでなければならぬ、顯現といふことは眞の無に於てあるといふこ

とである。主知主義の希臘人はプロチンの一者に於てですら、眞の無の意義に徹底することができなかつた。限定せられた一般者を越ゆると云へば、全然知識の立場に於て論ずることのできないと考へられるであらう、併しそれは知識成立に缺くべからざる約束である。單に一般と特殊との包攝的關係に於ても、既に此兩者を包むものがなければならぬ、眞の一般者とはかゝるものを云ふのである、判斷的知識の極致と考へられる矛盾的關係に於ては明に之を見ることができるのである。矛盾關係に於ては、少くも知るものと知られるものとが相接觸して居なければならない、主語の面と述語の面とが或範圍に於て合同して居なければならない、此故にかゝる知識はアプリオリと考へられるのである。矛盾的統一の知識の對象も、對象其者として矛盾を含んで居るのではない、否寧ろ嚴密に統一せるもの、毫末も異他性を容れないものと云ひ得るであらう、最勝義に於て客觀的と云はねばならぬ。矛盾するとは述語のことである、矛盾的關係といふのは、判斷の述語面に映されたものゝ間に於て云ひ得るのである。所謂主語面に於ては、是か非是かの對立性を成すのである。矛盾的統一の對象にまで行き詰つた時、判斷的知識の立場からしては、もはやそれと他とを更に包含する一般者を見ることはできぬ。併しかゝる對象といへども、述語可

能性を脱することはできぬ。然らざれば、判斷の對象となることはできないのである。是に於て我々は單なる述語面、純なる主觀性といふものに撞着せざるを得ない。始から主客の對立を假定して何處までも之を固執すればとにかく、然らざれば所謂客觀界を包んだ純なる主觀界、體驗の場所といふものに達することができる。かゝる場所に於て繫辭の有は、存在の有と一致するのである。客觀的對象の主觀と考へられる意識一般も、意識であるとすれば意識せられた對象と異なつて考へられねばならぬ、而して判斷の立場から云へば對象が於てあるもの、述語的なるものと云はざるを得ない、之によつて判斷意識が成立するのである。判斷の立場から意識を定義するならば、何處までも述語となつて主語とならないものと云ふことができる。意識の範疇は述語性にあるのである。述語を對象とすることによつて、客觀的意識を見ることができる、反省的範疇の根柢は此にあるのである。從來の所謂範疇は一般者の求心的方向にのみ見られたものであるが、之を逆の方向、遠心的方向に於ても見ることができるのであらう。判斷は主語と述語との關係から成る、苟も判斷的知識として成立する以上、その背後に廣がれる述語面がなければならぬ、何處までも主語は述語に於てなければならぬ、判斷作用といふ如きものは第二次的に考へられるの

である。所謂經驗的知識といへども、それが判斷的知識であるかぎり、その根柢に述語的一般がなければならぬ。すべての經驗的知識には「私に意識せられる」といふことが伴はねばならぬ、自覺が經驗的判斷の述語面となるのである。普通には我といふ如きものも物と同樣に、種々なる性質を有つ主語的統一と考へるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの點ではなくして一つの圓でなければならぬ、物ではなく場所でなければならぬ。我が我を知ることができないのは、述語が主語となることができないのである。それでは、數學的判斷の根柢となる一般者と、經驗科學的判斷の根柢となる一般者とは如何に異なると云ふでもあらう。前者に於ては、上に云つた如く特殊の面と一般の面とが單に合同するのであるが、後者に於ては、特殊を含む一般の面が之を包んで尙餘あるのである。元來判斷に於ては、述語となつて主語とならないものが、主語となるものゝ範圍よりも廣いのである。主語の方面にのみ客觀性を求める判斷的意識の立場から云へば、それは單に抽象的一般概念と考へられるであらう。併し我々の經驗的知識の基礎は此の如き述語的なる性質的なるものゝ客觀性に置かれねばならぬ。性質的なるものが、主語となつて述語とならない意義を有することによつて、經驗的知識の客觀性が立せら

れるのである。直覺の形式としての空間の如きものであつても、含むと含まれるとの關係に立つ前に、すべてが空間でなければならぬ、數學的知識の根柢に直觀があると考へられる所以である。直觀といふのは主語面が述語面の中に沒入することに外ならない。斯く直觀と考へられるものゝ背後に於ても消え失せない、對立なき對象をも含んで尙餘ある述語面が我々の意識界と考へられるものである。私に意識せられると云ふことは、かゝる述語面に於てあると云ふことを意味する、思惟の對象も之に於てあり、知覺の對象も之に於てあるのである。思惟の意識と知覺の意識とは異なると考へられるが、かゝる區別はその對象に卽して考へられるのである、知覺する私は、又思惟する私でなければならぬ。意識を作用と考へることすら、既に對象との關係に於て考へられるのである。作用其者すら意識せられたものである。意識せられた作用としてすべての作用が同一の意識面に於てある、之によつて思惟と感覺とが結合するのである。意識面といふのは判斷の主語を包み込んだ述語面であつて、斯く包み込まれた主語面が對立なき對象となり、その餘地が意味の世界となる。此故に感覺的なるものすらいつも意味の緣暈を以て圍繞せられ、思惟的なるものゝ中心にはいつでも直覺的なるものがある。普通には、始から主客を對立的に考

へ、知るといふことは主觀が客觀に働くことを考へるが故に、對立なき對象といふものが、主觀の外に考へられ、概念的なるものゝみ主觀に於てあると考へられるのであるが、所謂一般概念とは、直覺的なるものの意識面に於ける輪廓であり、意味とは之によつて起されるその意識面の種々なる變化である、恰も力の場の如きものである。意識に於ては、意味が内在するのみならず、對象も内在するのである。指示的關係といふのは意識外のものを指示するのではなく、意識面に於てあるものゝ力線である。我々は普通に自同律に於て表される直覺面を、意識面から除去して剩餘面だけを、意識面と考へて居る、私が前に云つた如く有に對する對立的無の場所をのみ意識面と考へて居る。此故に直覺的なるものゝ背後には意識以外のものがあると考へられる。併し直覺的なるものは、自己自身に同一なるものとして、述語面の中に含まれて居なければならぬ。感覺的なるものは一々自己自身に同一なるものでなければならぬ、唯一的なるものは直覺的なるものゝ極限である。

一般と特殊との包攝的關係を何處までも押し進めて行つて、自己自身に同一なるものゝ背後にも、尙之を越えて廣がれる述語面が眞の意識面である、直覺も直に之に於てあり、思惟も直に之に於てある。對立的對象が之に於てあるのみならず、無對立

の對象も之に於てあるのである。すべての主語面を越えて之を内に包むが故に、すべての對象は之に於て等しく直接でなければならぬ。種々なる對象の區別は、之れに於てあるものゝ關係から生ずるのである。主語面を越えて述語面が廣がるといふ時、我々は判斷意識を超越すると云はねばならぬ。主語を失つた時、判斷といふ如きものは成立しない、すべてが純述語的となる、主語的統一たる本體といふ如きものは消失して、すべて本體なきものとなる、此の如き述語面に於て意志の意識が成立するのである。判斷の立場のみ固執する人には、此の如き述語面を認めることはできないであらう。併し意志は判斷の對象となることはできぬが、我々に意志の自覺がある以上、意志を映す意識がなければならぬ。判斷自身すら判斷の對象となることはできないが、我々は判斷を意識する以上、判斷以上の意識がなければならぬ、而して此の如き意識面は、之を述語的方面に求めるの外はない。述語面が主語面を越えて深く廣くなればなる程意志は自由となる。併し何處までも意志は判斷を離れるのではなく、意志は勝義に於て述語を主語とした判斷である、判斷を含まない意志は單なる動作に過ぎないのである。判斷は自己同一なるものに至つてその極限に達する、かゝる自己同一なるものゝ輪廓線を越ゆる時、意志となる。それで意志の中心に

は、いつでも自己同一なるものが含まれて居る。上に云つた如く自己同一なるものゝ周圍は意味を以て圍繞せられて居る、對立なき對象の周圍は對立的對象を以て圍繞せられて居る。述語面が自己同一なるものを含んで更にそれ自身の領域を有する時、述語面は主語面に對して無なるが故に、それが深くなればなる程、自己同一なるものゝ中に意味が含まれる樣になる、無對立の對象の中に對立的對象が含まれる樣になる。卽ち自己同一なるものは意志の形を取つて來るのである。自己同一とは主語面と述語面とが單に一となることではない、何處までも兩面が重り合つて居るのである。自己同一なるものがその背後の述語面に移された時、自己同一の主語面を圍繞して居た意味は、述語面に於ける自己同一の中に吸收せられるのである。述語面に於ける自己同一が卽ち我々の意志我の自己同一である。自己同一の外にあつた意味が自己同一の中に含まれるが故に、意志に於ては特殊の中に一般を含むと考へられる。無論それはもはや特殊といふべきものではなくして個體でなければならない、判斷的意識の面からその背後に於ける意志面に於ける自己同一なるものを見た時、すべて個體となるのである。判斷的意識面に於ては對象と意味とは區別せられるであらう、無對立の對象と對立的對象とも區別せられるであらう。併し自

己同一の極限を越えて單なる述語面に出た時、一度此等の區別は消滅して同等となると考へることができる。單なる意識我の立場に於ては、直覺的なるものも、思惟的なるものも、同位的に意識せられると考へざるを得ない。作用の意識に於ては、感覺作用も思惟作用も同樣に意識せられる。こゝに隨意的意識の世界が開かれると共に、意味と對象との直接なる結合も可能となるのである。斯く一旦述語面に於て意味と對象とが兩ながら直接となつた後、述語面に於て對立的對象と無對立對象とは如何なる關係に於て立つか、述語面に於ての統一とは何を意味するか、述語面に移されたる自己同一とは如何なるものであらうか。單に知識的に云へば、既に主客合一であつて、更にそれ以上のものを考へることはできないであらう。併し所謂主客合一とは主語面に於て見られる自己同一であつて、更に述語面に於て見られる自己同一といふものがなければならぬ。前者は單なる同一であつて、眞の自己同一は却つて後者にあるのである。直觀とは一つの場所の面がそれが於てある場所の面に合一することであるが、斯く二つの面が合一すると云ふことは、單に主語面と述語面とが合一すると云ふことではなく、主語面が深く述語面の底に落ち込んで行くことである、述語面が何處までも自己自身の中に於て主語面を有する事である、述語面自身

が主語面となることである。述語面自身が主語面となるといふことは、述語面が自己自身を無にすることである、單なる場所となることである。包攝的關係に於て、特殊が何處までも特殊となつて行くといふことは、一般が何處までも一般となつて行くといふことでなければならぬ、一般の極致は一般が特殊化すべからざるものとなるのである、すべての特殊的內容を超越して無なる場所となることである。主語と述語との判斷的關係から云へば、之を單に主客合一の直觀といふの云ふのである。是故に無對立なる對象の意識は、意識が意識自身を超越するのではなく、意識が深く意識自身の中に入るのである。之を超越するといふのは、對象的關係のみを見て意識自身の本質を考へないからである。意識の本質を主語面を包んで廣がる述語面に求めるならば、此方向に進むことが純な意識に到達することである。その極致に於て、述語面が無となると共に對立的對象は無對立の對象の中に吸收せられ、すべてがそれ自身に於て働くものとなる、無限に働くもの、純なる作用とも考へられるのである。此故に意志はいつも自己の中に知的自己同一なるものを抱くと云ふことができる。主語の方向に於て無限に達することのできない本體が見られる如く、述語の方向に於て無限に達することのできない意志が見られるのである。而してその

極、主語と述語との對立をも超越して眞の無の場所に到る時、直觀となる。斯く述語をも超越するといふことは無論知識を超越するといふことでなければならぬ。併し述語が主語を超越するといふことが、意識するといふことであり、此方向に進むことが意識の深底に達することであるとすれば、知識の立場に於て我々に最も遠いと考へられるものが、意志の立場に於ては最も近いものとなる、對立的對象と無對立的對象との關係は逆となると考へることができる。「或者がある」「或者がない」といふ二つの對立的判斷に於て、その主語となるものが全然無限定として無となれば、ヘーゲルの考へた如く、有と無とが一となると考へることができる、而して我々はその綜合として轉化を見る。かゝる場合、我々は知的對象として主語的なるものを求むれば、唯轉化するものを見るのみであるが、その背後には肯定否定を超越した無の場所、獨立した述語面といふ如きものがなければならぬ。無限なる辨證法的發展を照すものは、此の如き述語面でなければならない。

包攝的關係を何處までも述語の方向に押し進めて、その極限に於て意識面に到達する、主語面を越えて之を內に包むものが意識面である。感覺的なるものと云へども、それが知的對象として考へられる限り、その背後に一般的なるもの、卽ち述語的な

るものがなければならぬ。かゝる述語的なるものが主語となる時、廣い意味に於て働くものが考へられるのである、而してかゝる意味に於て働くものは我々の意識に最も直接なるものと云ひ得るのである。此故に一般概念の限定なくして働くものを考へることはできない、我々は判斷の方向を逆にすることによつて働くものを考へ得るのである。我々の經驗内容が種々に分類せられ、概念的に統一せられるに從つて、種々なる作用が區別せられる、而して種々なる一般概念が、更にその上にも一般概念的に統一せられるに從つて、作用の統一といふものが考へられる。かゝる一般概念的統一の方向を何處までも押し進めて行けば、遂にすべての經驗内容の統一的一般概念に到達するであらう、此の如きものが物理的性質でなければならぬ、共通感覺の内容とも云ふべきものであらう。フッサールの知覺的直覺といふのは、此の如き意味に於て一般概念によつて限定せられたる直觀に過ぎない。更にかゝる限定を越えて、述語的方面を押し進めれば、知覺的なるものを越えて思惟の場所に入る。此場合に於ても、意識は知覺的なるものを離れるのではない、知覺的なるものは直觀的なるものとして之に於てあるのである。唯その剩餘面に於て單なる思惟の對象といふ如きものが見られるのである。所謂自覺的意識とは、此の如く知覺的なるも

のも、思惟的なるものも直接に之に於てある場所である。自覺的意識面とは恰も對立的無の場所に當るであらう、我々が普通に意識面と考へて居るものは是である。併し我々は尙一層深く廣い有も無も之に於てある眞の無の場所といふものを考へることができる、眞の直觀は所謂意識の場所を破つて直にかゝる場所に於てあるのである。對立的無の場所は限定せられた場所として、尙主語的意味を脫することができないから、すべて超越的なるものを內を包攝することはできぬ、眞に直觀的なるものはかゝる場所をも越えたものでなければならぬ。所謂感覺的なるものも直觀的なるものとして、その根柢は所謂意識面を破つて深く眞の無の場所に於てあるのである。眞に直觀的なるものとしては、感覺的なるものは藝術的對象でなければならぬ。場所が無となるに從つて對立的對象は無對立的對象の中に吸收せられて、對象は意味に充ちたものとなる。此の如き直ちに直觀の場所卽ち眞の無の場所に於てあるものが、所謂意識の場所、卽ち對立的無の場所に於て見られる時、それが無限に働くものとなる。而して直觀の場所は所謂意識の場所よりも一層深い意識の場所であり、意識の極致であるから、內に超越的なるものを見ると考へられるのである。併し逆に直觀の場所から之を見れば、之に於てあるものが、對立的無の場所へ投げた

自己の影像に過ぎない。此の如く直觀の場所から見た時、働くものとは之に於てあるものゝ自己限定として意志作用である。而して直觀的なるものゝ於てある場所、直觀の述語面に於てあるものを、知識面から見れば無より有を生ずる無限の作用と見られ、無も之に於てある直觀面から見ればそれが意志である。直觀面は知識面を越えて無限に廣がる故に、その剩餘面に於て隨意的意志が、成立するのである。判斷とは一般の中に特殊を包攝することであり、變ずるものは相反するものに移り行く。變ずるものを意識するには、相反するものを含む一般概念が與へられて居なければならない。かゝる場合、一般概念が意識面に於てあり、特殊なるものが對象面に於てあると考へられる間は、働くものを意識することはできぬ。唯、對象面が意識面に附着した時、卽ち一般的なるものが、直に特殊なるものゝ場所となつた時、働くものが見られるのである。對象面が意識面に附着するといふことは、對象が判斷するものとなり、意識が變ずるものとなることである。併し對象面と意識面、主語面と述語面とが單に一つとなつてしまへば、動くものもなく、判斷するものもない。かゝるものが見られ得るかぎり、述語面が主語面を包むものでなければならぬ、又判斷意識の性質よりして何處までも斯く考ふべきである。變ずるものは相反するものに移り行く

といふことは、述語として限定することのできない何物かゞあり、之によつて述語となるものが限定せられると共に、その物は又すべてに述語となると云ふことを意味する。主語的に云へばそれは個體といふべきものであらう。述語が主語を包むといふ考から云へば、主語が無限に述語に近くことが働くものを考へるといふことであり、述語面から云へば、述語面が自己自身を限定することであり、卽ち判斷することである。是故に述語面が限定せられる限り働くものが考へられる、而して判斷の矛盾を意識する述語面に於てのみ、眞に働くものが考へられるのである、矛盾的統一の述語面に於てはじめて述語面が獨立となるのである。單に限定せられた述語面は判斷の根柢とはなるが、働くものとなることはできない。働くといふのは主語面が述語面に近くと考へられる如く、又述語面が主語面に近くことである。述語面が主語面を包んで餘地あるかぎり働くものとなる。働くとは主語面を包んで餘ある述語面が自己の中に主語面を限定することである、包攝的關係を述語面から見ることである。それで、一つの包攝的關係は、その主語面を包んで餘ある述語面からは意志であり、その主語面に、合する範圍に於ては、判斷であり、その含む主語面に於ては働くものとなるのである。併し

述語面が自己を主語面に於て見るといふことは、述語面自身が眞の無の場所となることであり、意志が意志自身を消すことであり、すべて之に於てあるものが直觀となることである。述語面が無限大となると共に場所其者が眞の無となり、之に於てあるものは單に自己自身を直觀するものとなる。一般的述語がその極限に達することは特殊的主語がその極限に達することであり、主語が主語自身となることである。

以上論じた所は多くの繰り返しの後、遂に暗中摸索に終つたことを遺憾とする、特に尙直觀の問題には入ることができなかつた。唯、私は知るといふことを、從來の如く知るものと、知られるものゝ對立から出立する代りに、一層深く判斷の包攝的關係から出立して見たいと思ふのである。